
クライシス・ゾーン～翡翠の悪魔～

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クライシス・ゾーン〜翡翠の悪魔〜

【Nコード】

N4062T

【作者名】

河野 る宇

【あらすじ】

*「ここはどこだ……？」

青年は呆然としてその端正な顔をいぶかしげに目の前の風景に向けた。

<異世界コメディアクションファンタジー>

*制作協力：観月 らんサマ

小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

* 草原の人影

「……」

青年は目の前に広がる草原に眉をひそめた。見渡しながら記憶を呼び起こす。

確か……家で武器の手入れをしながら効率の良い装備の仕方を考えていた処に突然、視界が歪んで次に目を開いたら草原の真ん中にいた。

あちらこちらに点在する森が見える。遠くには切り立った山々が連なり、明らかに自分のいた世界とは大気の様子が異なっていた。とりあえず体を確認する事にする。

服はグレーのミリタリー装備。ショルダーホルスターとバックサイドホルスター、そして両足のレッグホルスターには銃が収まっていた。

他に数種類の武器を装備している。

因みにホルスターとは拳銃ハンドガンを収めるケースの事で、場所によって名称が異なる。

「ふむ……」

これがシャワー中でなかった事に安心した。裸で草原に立ちつくす自分の姿は想像するに悲しい。

どれだけ持てるかを再確認していたため、いつもより装備品は多い。予備の弾倉マガジンも多めだ。

青年の名はベリル・レジデント。割と名の通った傭兵である。

金髪のショートヘアにエメラルドの瞳。外見は25歳ほどで魅力的な容姿をしている。

* コルコル族

「どうしたもんかな」

考えていると向こうから歩いてくる人影が視界に入ってきた。

「！」

向こうもこちらに気が付いたらしくこちらに近づいてくる。男女のようで男の方はベリルに警戒しているようだった。

「！」

女の方に視線が留まる。

その髪は鮮やかな青。空色……と言うにふさわしい。女性というよりもその面持ちから少女であると推測出来た。その少女がベリルの姿に笑顔を見せて駆け寄ろうと身を乗り出すと後ろで1つに束ねた髪が小さく揺れた。

しかし隣にいた青年がそれを止める。それも無理もないかもしれない……

「異世界。とても言うのか？」

こちらの服装と違ってあちらの服装にベリルは目を細めてつぶやいた。青年は薄手のマントに身を包み男女共に腰に剣がたずさえられていた。

人数的に言えば2対1でベリルの方が違和感がある。

「私が数時間、眠らされていないとすればそれも有りか」

近づいてくる2人を待ちながら考えた。

「こんにちは」

近くで確認してもやはりまだ少女のようだ。束ねている髪よりも濃い色の瞳を可愛くベリルに向けている。

「やあ」

屈託のない笑顔に明るく返す。言葉が通じている……？

「あの〜ここ、どこですか？」

「それは私も知りたい処だ」

「え？」

少女の問いかけからして、どうやらお仲間らしい。

「あの、あたしティリス。こっちがリユート」

リユートと紹介された青年はベリルよりも長身だ。といっても彼は174cmと小柄な方ではあるが、その彼よりも10cmは高いと窺える。

ベリルが興味をそそられたのはその顔立ち……右眉から頬にかけて右目を縦断する大きな一線の傷があった。

落ちて着いた金色の髪と翡翠色の瞳。髪は肩にかかるほどの長さで手入れしているようではないが風になびくほどの柔らかさがある。

「ベリルだ」

「変わった服ですね」

落ち着き払ったベリルを2人はマジマジと見つめた。

「私もそう思っていた」

「え……？」

「私から見ればそちらがそうだ」

ポカンとしたティリスに付け加える。

「まあ、ファンタジーと思えば理解の範囲内だ。この世界では私の方が異質だと考えられる」

「はあ……」

勝手に納得しているベリルにティリスは呆然とする。

「！」

チョンチョン……とベリルの腰の辺りを何かが突ついた。振り返

るとやや低い位置に動物のような顔が見上げていた。

「フェネツクか」

「可愛い！」

「ティリス！ むやみに近づくな」

初めて口を開いたリユートをベリルは一瞥して向き直る。そこにいたのは130cmほどの二本足で立っている大きな耳のキツネ。

「見た事ある！ リネラスよね！」

「キツネリスが服を着て二本足で立つか」

「どうやら彼らの世界にいるフェネックと似た動物は『リネラス』
というキツネリスらしい。その動物？ は耳を垂れてベリルたちを
見上げて発する。」

「あ、あの～あなた方は我々が呼び寄せた勇者様ですよね？」

「……勇者？」

キョトンとして聞き返したリユートは2人と顔を見合わせた。

「……」

やはり私が異質だったか……ベリルは思いながらコルコルという
種族だと名乗ったフェネックもどきの後をリユートたちと共につい
ていく。

「そういえばフェネックってなんですか？」

少女は無邪気に問いかけた。

「私の世界にいるキツネの仲間だよ。イヌ科最小の動物だ」

「へええ～」

感心して前に向き直るとティリスは満面の笑みを浮かべた。

「きゃ～可愛い！」

「ティリス！ 1人で行くな」

リユートは駆けていこうとした少女の腕を掴んで止める。

なるほど、少女の方は好奇心が旺盛で順応性も高いようだ。一方、
青年の方は警戒心が強く少女には世話焼きだな。とベリルは冷静に
2人を分析していた。

案内されたコルコル族の村は彼らの目から見るととてもこぢんま
りとしていた。

平均身長130cmの彼らの家はやはり小さめで、人間と同じ文
明を有しているようだが見た目のためか相当に可愛い。

長老の家に招かれたがリユートの身長では3人が入るととても窮
屈になる。

という訳で広場に集まった。木々の間隔が大きく空いた森の中、

コルコル族の集落はそこにあり広場にはテーブル代わりの大きな切り株が真ん中にどしんと据えられていた。

主に集会場として用いられているのだろうか。

しゃがみ込んだ3人に小さめのコップに入れられた飲み物が振る舞われる。なんでも嬉しそうに眺めているティリスを目を細めて見つめるリユート。

リユートは気を取り直して長老らしき人物に視線を移し発する。

「勇者を呼び出したと言ったが。どういう事だ？」

その問いかけに長いあごひげをさすりながらフェネック……もといコルコル族の長老は小さく唸った。

「うむ。実はの……」

「僕たちの集落の近くに、とても強いモンスターが住み着いたんです」

脇から青年が説明を始めた。

「僕たちの仲間が何人も奴の餌食になって、戦ったのですがとても敵う相手じゃなかった……」

コルコル族の青年、長老の息子レキナは苦い顔をした。ここまでベリルたちを案内してきた者だ。

そのモンスターはしばらく集落の近くにいたが今は遠い場所に住处を移したらしい。しかし、その恐怖は消える事は無い。

どうしようもなくなった彼らは勇者を呼び出す事を思いつく。長老もそれに賛成し村の魔法使いと共に実行した。

「1つ聞くがこの世界には人間はいないのかね？」

軽く手を挙げて問いかけたベリルに近付いてレキナは説明する。

「別の大陸にいます。しかし遠すぎて我々ではたどり着けません」

「……」

目を伏せて答えたレキナの顔をベリルはじっと見つめた。

「アガガガ!？」

「この口でどうやって喋っているのだ？」

「ちよっ……ベリル!」

レキナの口をガシツと掴んで広げ、のぞき込んでいるベリルをティリスが慌てて止めに入った。

ここまでの会話に違和感がまるでない。表層意識を通しての会話なのか？ その世界に無い単語や名称はそのまま伝わっているらしい。フェネックがそうであったように……とベリルは1人、推測していた。

「なぜ俺たちが呼ばれた？」

リユートは眉をひそめる。もちろん『俺たち』の中にベリルは入っていない。

「そんなもの、特定して呼び出せるとは思えん。たまたま次元の裂け目に、我々がいたというだけだろう」

「ああ、なるほど」

薄笑いで応えたベリルにティリスは納得した。

「ある程度の能力の限定くらいは出来るかもしれないがな」

足を組んでベリルはニヤリとした。この状況を楽しんでいるようにも見える。

「……」

リユートはそんなベリルをいぶかしげに見つめる。

それなりの能力……こいつには一体、どんな力があるというんだろう？ 体つきからすると戦士のようなだが、ざっと見て剣は持っていない。

あちこちにベルトで黒い塊が収められていて、ナイフが唯一の武器のようだが……あの黒い塊に秘密があるのか？

「ベリルって何歳？」

「！」

ティリスの声にリユートはハツとした。

「ん……？」

その質問にベリルは数秒考える。

「25だ」

「ええ！？ もっと下かと思った！」

驚いたあと、ちらりとリユートを一瞥。

「……………今どうして俺を見た」

「別に……………」

「君は15、16歳と見たが」

「はい、16です。リユートは19歳」

その言葉にベリルも青年をちらりと見た。

「あたし、てつきりリユートと同じ年くらいだと思って……………」

「……………」

それは俺が老け顔だと言いたいのかティリス……………リユートは少女の横顔に問いかけたかった。

確かにリユートという青年は19歳という年齢よりも大人びて見える。

場数を踏んできた者のそれであり、せきがん隻眼であるにも関わらず闘いをこなしてきたであろう雰囲気が見目麗しい青年だ。

「年は気にするな」

笑って言ったベリルにティリスはほっとした。見た目は若いのにその雰囲気としゃべり方に彼女は思わず年齢を聞いてしまったのだ。

「と、とにかく。お願いです、モンスターを倒してください」

気を取り直してレキナは3人に懇願した。

「いきなり了承は出来ない」

ぶっきらぼうに言い放ったリユートにティリスは少しムツとなる。

「この人たち困ってるのよ。そんな言い方ないじゃない」

それにベリルがフォローを入れた。

「相手が解らない状態で気安くOKは出来ないのだよ。それなりの責任があるからね」

「あ……………そか」

ティリスはリユートの考えを理解していなかった事に肩を落としたりした。

「……………」

なるほど、複雑な2人なようだ。

恋愛に“うとい”彼でもこの2人の関係はすぐに理解出来たらしい。

「ひとまず我々の宿を頼みたい」

「あ！　すぐに用意します！」

レキナは急いで他の者に指示した。ベリルがその後に続いて立ち上がりレキナに何か言っているようだった。

「……」

その様子を見つめながらティリスは小さく溜息を吐き出す。

「疲れたのか？」

「あ、ううん」

問いかけたリュートに少女は笑顔を返した。心配をかけまいとして元気に振る舞っているのがリュートには解る。

「！　どうしたの？」

「そこにいろ」

リュートはそう言ってレキナとベリルの歩いていった方に足を向けた。

「！！」

拓けた場所にコルコル族の男たちが集まって何かしている。どうやら簡易の建物を作っているようだ。ベリルがそれを手伝っていた。

「！！」

歩いてくるリュートを視界の端にとらえる。

「側にいなくていいのか？」

手を止めずに問いかけた。

「……ティリスの寢床から作ってくれないか」

「そのつもりだよ。鍛えているようだが、環境がかわった事でストレスが多かるう」

言いにくそうに口を開く青年にベリルは笑って応える。

「……すまない」

軽く手を挙げて返したベリルの背中を一度見てティリスの元に戻っていく。

「……本当に25なのか？」

眉間にしわを寄せた。

25歳にしてはなんてジジ臭いしゃべり方だ。

「！」

戻るとティリスの笑い声が先に耳に届いた。

コルコル族の子どもを抱きしめている少女に目を細め口元が緩む。

「あ、リユート！ 見てっ可愛い！」

「ああ」

それが見つかる前に表情を戻した。

「友達以上、恋人未満。って処かね」

木に肘を突き、その手に頭を乗せながらベリルが遠目でぼそりとつぶやく。

「いいですねえーああいうの」

レキナが隣で小さく笑う。

「！」

しばらくして戻ってきたベリルたちに2人は目を移す。

「とりあえずティリスの寢床だけだ。我々はここで野宿といこう」

ベリルは親指で奥を指し発した。

「ありがとう」

ベリルが体を休めるために地面に腰を落とそうとした刹那――ティリスの後ろから黒い影が現れる。

「！」

リユートが剣を抜いて振り返ったと同時に何かが破裂したような音がして黒い影は倒れ込んだ。

「……」

3mはある巨大な犬を思わせる風貌。長い爪に凶暴さが見て取れるギラついた牙。その猛獣は苦しむ間もなく死んだようだ。

その額には小さな穴が空いていた。

「！」

振り返るとその先にいるのは片膝をつき黒い塊を獣に向けているベリルの姿。その瞳はゾクリとするほど冷たい。

やはりあれは武器だったのか……リユートはその黒い塊に警戒した。

他に気配が無いとベリルはまた元の飄々（ひょうひょう）とした顔つきに戻りシオルダーホルスターに銃を仕舞った。

そして地面に落ちている空薬莖からやっきょうを拾うとパンツのバックポケットに差し入れる。

「ガラムです！ どうしてこんな処に……こいつは岩山にいるはずなのに」

レキナは驚きで目を丸くした。

ベリルはガラムの死体をちらりと見たあとその右側に歩み寄った。

「……」

そこにいたのはコルコル族の子ども。恐怖に2匹でガタガタと抱き合って震えている。

「……！」

ティリスはその姿に胸が痛んだ。

その2匹の前にベリルは静かにしゃがみ込み手をさしのべた。

「！？」

2匹はビクリと体を強ばらせたがその瞳を見て震えが止まる。

「心配ない」

発して向けられた優しい眼差しに2匹は思わず彼の首にしがみついた。

*犬も食わない

「キュー！」

「キュー！」

泣きじゃくる2匹の頭をなでてやる。

「……良かった」

その姿にティリスも笑顔を取り戻し駆けつけてきたそれぞれの親に受け渡す。

「？」

ほっとしたティリスがガルの死体は何やら動いているので目を向ける……

「きゃあああ！？」

みんなが解体作業をしていた。

「食料だろう。貴重なタンパク源だ」

驚いた彼女にベリルがキョトンとする。

「ああ……そか」

「……」

リユートは少しふらついているティリスの脇に無言で支えるように立つ。

普段あれだけ魔物を倒しているくせに……少々、呆れて見下ろした。そしてベリルに視線を移す。

「……」

あの巨体を一撃で……どれほどの破壊力を持つ武器なんだ。

夕刻——太陽が傾きかけた頃、ベリルが広場に戻ってきた。

「！」

その姿にリユートが驚く。

「着替えたのか」

「うむ。この世界に合わせなくてはな」

彼はレキナに服を作ってくれるように頼んでおいたのだ。持ってきた武器などをそのまま装備出来るように依頼した。

そしてその腰には……リユートは無言でその腰にある剣を見つめた。

「！ ああ……」

ベリルはそれに気が付いてその柄に腕を乗せる。

「ナイフでは心許ない。しんきんカートリッジにも限りがあるのでね」

「……カートリッジ？」

聞き慣れない言葉に少し首をかしげた。ベリルは小さく笑って右太もものレッグホルスターに収められている黒い塊を取り出す。

「これだけでは効果を持たない」

言いながら弾倉マガジンを外し中に入っている鈍い金色の細長い金属を取り出した。

「カートリッジがあつてこの武器は力を発揮する。この世界でこれが製造可能だとは思えん」

限りのあるものは有効に使わんとな……ベリルは薄く笑った。それらを仕舞ったあと鞆さやから剣を抜く。

「彼らの長剣らしいのだが」

60cmほどの剣は周りの緑を映し出していた。

「私にはこれくらいが丁度良い」

軽く2〜3振り回して再び鞆に収める。人間からすればこの剣はグラディウス並のサイズだ。

リユートの持つ剣は片手半剣というもので130cmは優にある大剣である。それを腰に据えている。

彼らの世界ではリユートは自由戦士と呼ばれる者だ。現代の傭兵に似ている。

戦士であるにもかかわらず彼は一切の鎧を身に付けていない。それだけの強さを持っているという事なのだろうか？

「あ、着替えたんだ」

遅れてきたティリスがベリルの姿を見て笑顔を見せる。彼らにと

つてはこちらの方が違和感が無い。

彼女は神官戦士と呼ばれる職業で怪我の治癒を得意とする。他にも数種の魔法を使いこなすらしい。

ティリスは付けていた胸当てを集落に来てから外しているが、女性には胸当てだけでも長時間の装備は重いかもしれない。しかし彼女の鎧は特別なものだった。

持たせてもらうと想像よりも軽くベリルの世界には無い金属だと窺えた。

「装備を確かめている時に呼ばれた」

笑いながらつぶやく。

「あたしたちは森の中で休んでる時だったね」

ティリスがリユートにニコリと笑いかけると彼は少し頷いた。

「入浴中じゃなくてホツとしたよ」

「え……」

「裸で立つ自分の姿は勘弁だ」

「！　　そ、そうよね」

確かにそうだね……少女はその言葉に想像して笑いながら顔を引きつらせた。

「……」

リユートはティリスの胸元を上から見つめる。それに気が付いたベリルは薄く笑みを浮かべた。

「？」

ベリルが見ている先にティリスが視線を移すとリユートはすいと視線を逸らす。そんな2人に喉の奥で小さく笑った。

しばらくして料理が運ばれてくる。

「……」

これってあの時のモンスターの肉……？　目の前の肉料理にティリスは少し躊躇した。リユートとベリルを見ると普通に食べている。

「！　　」

戸惑っているベリルが微笑んでウィンクした。意を決し料理に口を付ける。

「！ 美味しい」

思っていたものとは違い塩とコシヨウが効いていて、かけられているソースも絶妙に肉の味を引き立たせていた。

食べ終わり木の側に寝そべっているベリルにティリスが近寄る。

「ありがとう」

「美味かつたろう」

両腕を頭の後ろで組み笑って発した。少女はその隣に膝を立てて座り込む。

「あなたって……リユートに似てる」

「！ 私が？」

ティリスはベリルから視線を外し暗い森の中を見つめた。

「さつき、子どもたちに笑いかけたでしょ。それが似てたの」
優しいけど、寂しそうな……瞳。

「……」

その言葉にベリルは小さく笑って目を閉じた。

翌朝——ベリルとレキナたちが集まって何か話し合っていた。

「？ どうしたの？」

いぶかしげにその中に入ってきたティリス。

「馬を捕まえる」

「馬？」

聞き返したティリスにあごで示す。

「彼らの馬では我々には無理がある」

視線の先を見やると小型の馬、ポニーに似た動物が目映った。

「例のモンスターは東の洞窟に住み着いているらしい」

「ここから数十日はかかります」

レキナが地図を広げて付け加える。

「ここが我々のいる大陸。コルレアス大陸です」

言いながら左下の大陸を指さす。

「人間がいるのはどこだ」

ベリルの問いかけに右下の大陸を示す。

「エナスケア大陸。海流が激しくて僕たちにはたどり着けないんです」

この大陸には長距離を飛べる飛行能力を有する生物もいないとの事だった。

「……」

なるほど、勇者を召喚しようという気にもなるか。自分が果たして『勇者』として活躍出来るかどうか……はなはだ疑問ではある。

持っているのは傭兵とレンジャーとしての経験に武器、そして…

…『魔法』なんていう力は一切、持ち合わせていないのだ。

ベリルは腕を組んで溜息を吐き出した。

コルコル族の若者たちとベリルの3人は草原を訪れた。

「……！」

リュートが見回すと遠くに何やら動く影。

「いました」

レキナがその影を指さす。

「……トカゲ？」

ティリスは眉をひそめた。

「どちらかというと恐竜だな」

ベリルが口の端をつり上げる。

黄土色のその体はウロコは無いが爬虫類の表皮のように硬くダチヨウのごとき動きだが翼も前足といったものも無い。

2 mほどの体長で顔つきは亀を思わせる。

「カルクカンです。すばしこくてなかなか捕まえられません」

レキナの言葉のあとベリルは彼らの馬の一頭に近寄り体をさすっ

た。

「すまんが少し無理をしてもらっぞ」

言ってレキナからロープを受け取る。

「何をする気だ」

「あれを捕まえる」

リユートの問いかけに小さめの馬にまたがり応えた。

「え？」

聞き返したティリスには応えず馬の腹を蹴りカルクカンに向かつて走り出すその手には輪にしたロープ。

「クワー！」

カルクカンは驚いて逃げようと体を反転させたがその首にロープを投げてみごとにカルクカンの捕獲に成功した。

「すごい！」

ティリスは嬉しそうに駆け寄りカルクカンを見上げた。

「カウボーイに感謝だな」

目を細めて笑った。以前にカウボーイたちに投げ輪の使い方を教わった時の事を思い出す。

あと二頭を探して一同は移動する。広い草原、さほど数の多くないカルクカンを探すのは少し苦労した。

三頭の捕獲に成功した頃には夕暮れ近くになっていた。

「大丈夫……？」

ティリスはリユートの引く馬に横乗りになって心配そうに見つめる。

「お前くらいの重さなら問題なかるう。集落はさほど遠くない」
少女らしい優しさにベリルが笑って応えた。

「戻ったらさっそく鞍を作ります」

「すまん」

集落に戻るとカルクカンは厩うまやに引かれていった。

「……」

それを見ているリユートにベリルが発する。

「あれは大人しい性格で人にもよく慣れるそうだが、
噛みつく事も滅多にないらしい。」

言ったベリルを一瞥しリユートはティリスの元に足を向けた。それにベリルは小さく笑って溜息を吐き出す。

「ね、リユート。あたしさっきの緑の目のコがいい」

ティリスはすでに自分の乗るカルクカンを決めているようだった。ベリルは？

見あたらないベリルの姿に辺りをキョロキョロと見回す。

「あ、サレファ。ベリルは？」

コルコル族の女性、サレファに聞いてみた。

「夕食作りのお手伝いをしていていますよ」

「え……」

「体がなまるからと色々と手伝ってくれて助かります」

言いながら遠ざかる後ろ姿を呆然と見つめる。

「……初めて来た時もベリルは手伝ってたよね」

「そういう性分なんだろ」

「あたしも何か……」

「お前は何かするな」

後の言葉をリユートが切った。

「どうしてよ」

ティリスはムツとしてリユートを見上げる。

「料理が出来るか？」

「……」

それに言葉を詰まらせた。

「でっ出来るもん！」

「人間の食えるものを？」

「……っ！」

ティリスは叫びかけたが口をすぼめてスネたように応える。

「美味しくないだけで……手伝っただけならあたしにだって」

「昨日の夕食はあいつが作ったらしい」

「！ 知ってたの？」

「そう言っていたのを聞いたただけだ」

お前はすぐに好奇心を出して迷子になるんだから俺の近くにいろ。

「ぐっ……」

リュートの一言に何も言えなくなった。

「お姉ちゃん遊んで！」

そんな2人の間にコルコル族の子どもたちが笑顔で割り込む。

「うん！」

その姿にティリスは目を輝かせて大きく頷いた。

「……」

リュートは疲れたように溜息を吐いて腕を組む。

「ケンカはよくないぞ」

夕食の準備を済ませたベリルがふきんで手を拭いながら笑いかけた。

「……誰のせいだと思っている」

「お前の言い方がヘタなただけだ」

にこやかに言い放つベリルにぐうの音も出ない。

お前は彼女の面倒を見ていればよい。子どもたちと遊ぶティリスを眺めながらリュートに発した。

「あんたには関係ない」

「彼女は自分で思っているほど体力がある訳ではなかつた」

「！」

「少なくとも環境の変化への負担はお前よりも大きいハズだ」

「……」

リュートは眉をひそめた。

「それで、あんたはその方法で環境に順応しようとしてるって訳か？」

「好きなだけだよ」

リユートに視線を合わせるように顔を少し上げて応える。

「あんだ……ジジ臭いな」

反撃に出る。

「よく言われる」

さらりと受け流された。

* 禅問答

次の朝、広場の切り株に紙が広げられた。A3サイズほどのクリム色の紙に何かの生物が描かれている。

「絵師に描いていただきました。名前はボナパスと名付けました」
レキナは描かれた獣の絵を指さして発した。意味はコルコル族の言葉で『怒りの者』。全身が真っ赤な毛に覆われていて、その姿は2つの頭を持つ獅子。

「大きさはリユート様の2倍ほどです」

「そんなに大きいのか？」

「何か特殊な力はあるか？」

ベリルの問いかけにレキナは真剣な面持ちになる。

「炎を吐きます」

「……」

リユートは無言でボナパスの絵を見つめた。

「高さが約3mちよいなら長さは5mほどかな？ 見た目からすると動きは機敏そうだ」

ベリルは少し思案する。

「レキナ、この時期の天候はどうなっている？」

「今は大きな嵐も無く、雨期も終わりましたから安心ですよ」

「ふむ……」

その言葉に再び考え込む。

「よし、出発は7日後だ」

「えっ？」

「……」

確かにモンスターを倒す目的で召喚されて来たけれど……突然の事にテイリスは声を上げた。

「この世界の環境には慣れてきたらう。しかし、奴がここに来るのを待つ訳にはいかん」

「……」

ベリルの言葉で黙り込むティリス。リュートはそれを無言で見つめている。

「集落の外の景色も見たいだろう？」

ベリルはボンと軽くティリスの肩を叩いてどこかに歩き去った。

「外の景色……」

ティリスは期待に胸を膨らませて自然と顔がほころんだ。

「ボナパスが攻めて来れば彼らが犠牲になるかもしれない」

「え？」

リュートがつぶやいた言葉にティリスはコルコル族たちを見つめる。

「……だから住処に行くのね」

旅の準備を始めたベリルにリュートは静かに近づいた。ティリスは入浴中だ。

「随分、指揮に慣れてるようだな」

「これでも複数を動かす事もあるのでな」

リュートに笑いかける。

「案内は僕とシャノフがします」

レキナはそう言ってもう1人のコルコル族の男性を紹介した。レキナよりも少し濃いめの毛色をしている。紹介が終るとレキナとシャノフは遠ざかっていった。

2人きりになるとリュートは少し気を張り詰める。ベリルにはそれが見て取れて喉の奥で笑った。

まだ信用されていない。それに別段、怒る事も無くむしろ当然であるようにベリルは受け止めている。

「……」

何か言いたそうな顔つきのリュート。

「置いていくのは無理だろ？」

「！？」

リユートは笑って言ったベリルに目を丸くした。そして険しい眼差しを向ける。

「……どうして俺の言おうとした事が」

「右も左も解らない世界だ、そう考えるのが当然だろう」

「通り、とりあえずの準備を終えたベリルはリユートに向き直った。その瞳は全てを悟っているように見えてリユートは思わず視線を逸らす。

「彼女は一人で残るほど弱くも強くもない。だろう？」

「……」

その言葉に顔をしかめる。

「出来る事は全て私がやる。ただし、私の指示には従え」

「あんたに何が解る」

それで俺たちを動かそうというのか……リユートは呆れたような顔になる。それは戦闘に対する物言いだ。見た処お互いの世界はまるで違う。

「お前は戦闘に長けているな」

「！」

「動きで解る。それプラス、別の要素を期待しているよ」

ベリルは荷物を抱えて倉庫に向かった。

「……」

ベリルと別れて、リユートは思案しながら集落の中を歩いていた。別の要素……そのひと言がひっかかった。俺に……それがあると気付いているのか？ 苦い顔になる。

「！」

そんな思考も水の音でかき消された。気が付けばそこは入浴場。女性側だ。風呂場の入り口は1つだが中で2つに分けられている。

「……」

一瞬よこしまな思考が支配する。

1歩、建物に近寄った時――

「ティリスはもう上がったぞ」

「!？」

しれっと発してベリルが後ろを歩いていった。

「……」

その後ろ姿を呆然と見つめていたリユートだったがハツとして、

「なんで知ってる!」

「さっき会った」

ヒラヒラと軽く手を振って振り返らずにそのまま遠ざかった。

夕食、リユートたちは彼らの食事にも慣れたようだ。自分たちの世界となんら変わらない味と調理法……そう考えると料理を手伝っているベリルの世界も似たようなものなのだろうとティリスたちは推測した。

「!」

食べ終わったティリスの前に皿が置かれた。

そこに乗せられているのは……

「可愛い!」

綺麗に飾られたパンケーキ。

「気に入っていただけかな?」

ベリルが笑って応えるとティリスは大きくまばたきした。

「作ったの!？」

「良い気分転換になる」

「凄い!　ありがとう」

周りでは子どもたちがベリルの作ったドーナツを持ってはしゃぎ回っていた。

「ベリルーありがと」

「ベリるベりる」

子どもたちが嬉しそうにはしゃぎながらベリルにしがみつく光景をティリスは微笑ましく眺めた。

「……」

ぶずつと見ていたリユートだったが……

「！」

1人の子どもが持っていたドーナツをリユートに差し出した。

「……」

首をかしげて、受け取るのを待っている。戸惑うリユートにベリルは小さく笑って受け取るように促した。

少し困ったように受け取るとその子どもはニコツと笑って再びドーナツを取りに走って行った。

「クスクス」

テイリスが嬉しそうに笑う。

「きつと、仲間はずれにされてるって思ったのよ」

「……！」

リユートはばつの悪そうにしてドーナツを口にして顔をしかめる。

それにまたテイリスは笑った。

「無理しなくていいよ。苦手でしょ」

そう言って出したその手にドーナツを乗せる。

「ベリルは平気なのね」

「好き嫌いは無い」

「！ 何を飲んでる」

「お酒です」

レキナの言葉にリユートはピクリと反応した。

「酒があるのか？」

「なかなか美味いぞ」

「お酒飲みながらドーナツ食べてるの？」

テイリスはベリルのその姿に啞然とする。

「オツなもんだ」

カップを傾ける。

「俺にも酒をくれ」

「はい」

「んゝ、しあわせ」

パンケーキにフォークを立て口に含んだティリスが満面の笑みを浮かべる。

「……」

リュートはそれを見て目を細めた。

「……」

ベリルは呆れて酒を傾ける。バレバレなんだけどね……上手く噛み合わない2人だなあとクスツと笑う。

ベリルは楽しんでいる……こういう処が『悪魔』だと言われるのだ。

人をおちよくる才能にかけては誰にも引けを取らないだろう。今後のリュートに同情さえ覚える。

そうして夜は更け集落の周りは暗闇に染まった。酒の入った木のコップを持ちながら広場で暗闇に目を向けるベリル。

夜は静かではない。むしろ騒がしいと言ってもいい。様々な声や木々のざわめき……ベリルはそんな音に耳を傾けていた。

「……」

そんなベリルの様子を同じく酒を飲みながら大きな切り株に肘を突いて見つめるリュート。

その時――

「！」

黒い影がベリルに手をいくつも伸ばしてきた。

「ベリル……っ!？」

「……」

黒い手に包まれていく……その手に身じろぎもせずベリルは冷ややかに眺めていた。

「くっ」

リュートは腰の剣に手をかける。ベリルはハンドガンをゆっくり手にして引鉄ひきがねを引いた。

「どうしました!？」

大きな音が集落に響き渡り、その音にレキナたちが驚いて集まってきた。その中にはティリスの姿も……

「なんでもない。寝ている」

「……っ!？ み、みんな寝てください。大丈夫なようですから」

発したベリル前に転がっている影にレキナは息を呑み、自分以外のコルコル族の人たちを遠ざけた。

*冷たいキス

「ウ……ウウ……オマエがほしい。ワタシ……ワタ」

「すまんね。お前のものにはなれんのだ」

どこか冷めた言葉でその影に言い放つ。

その黒い影は女のようなだった。手だと思っていたものは長い黒髪……しかしそれは人ではなく異様な雰囲気からして明らかにモンスターだ。

ベリルは息も絶え絶えの影を抱き寄せその唇にキスを与えた。

「!？」

ティリスは驚いて口を塞ぐ。

刹那——影は沢山の光の粒になって舞い散りながら消えていく。

その輝きは暗闇に散りばめられ儚く、か細く美しく静かに闇に還っていった。

「!」

ベリルは手に持っていたカップが無い事に気づき、辺りを少し探すとそれは草の上に転がっていた。小さく溜息を漏らしカップを拾って酒を注ぎに向かう。

「……!」

横切るベリルにティリスは少し体を強ばらせ何も言えずに遠ざかる背中を見つめた。そんな少女の隣には、いつものようにリユートがさりげなく支えるように傍にいた。

* 出発は前途多難

「……今のは？」

問いかけた彼女にレキナは苦い顔で応えた。

「『シャズネスの魔女』です。人の魂がモンスターになったものと云われています」

「！」

愛する者が死に、その苦しみに耐えきれず自ら死を求めたが天に昇ることも出来ずに彷徨い続け愛しい人を探し続け……やがてモンスターに姿を変えていく。

「ベリル様はその事を知ってらしたんでしょうか。そんなハズありませんよね」

語り終ったレキナも寢床に向かった。

「……」

ティリスは自分の手が微かに震えているのを確認し押さえるように胸の前で強く組む。

この震えはシャズネスの魔女に？ それとも……ベリルに？ 彼女は初めてベリルの瞳に背筋から冷たいものが走った。

あんな人は初めて……彼の何が私は恐ろしいんだろう？ それすらも解らない。頭が混乱しそうだった。

「無事に、天に還っただろうか」

「！？」

リユートの言葉にハツとする。

「そうか……還ったよね」

あの女の人最後に笑ってた。嬉しそうに愛する人に会ったみたいな顔だった。ベリルは安らぎを与えたんだ。戸惑いなくそれが出来る人なんだ……ティリスは顔をほころばせた。

「……」

その表情をリユートは黙って見つめる。

次の日――

「！ 出発を早める？」

ベリルの言葉にリユートが聞き返した。

「うむ。2日短縮する」

「理由を言ってくれ」

「おはよう！」

青年が口を開こうとした時ティリスが2人に挨拶をかわした。

「！ どうしたの？」

リユートの表情に首をかしげる。

「出発を2日早めるそうだ」

「え？」

「くだらだと長居は無用だ。早められるのならそれに越した事は無いというだけだよ」

ベリルは羽ペンを器用に回しながら小さく笑った。

早く元の世界に戻りたいだろう？ 地図に何かを記しながら発する。

「それはそうだけど……」

「ここにいるあいだ時間は流れているのだ。向こうでいなくなっていた時間は少しの差だとしても、ここで過ごした時間は戻らない」

「つまりここにいる間は俺たちは余計に年を取っているという訳か」

「私は平気だとしても彼女には酷だと思うが」

それにティリスは少し考える。

「……えと、こっちでももし5年過ごしたとしたら、戻った時間があったたちが消えたすぐ後だとしても5年分の年は確実に取ってるって事？」

解ってもらえた事にベリルとリユートは無言で首を縦に振った。

「た、確かにそれはちよつと辛いわ」

しかし言っですぐ何かを思いついたように続ける。

「あ、でもリユートだけ戻ってあたしがリユートと同じ年になるま

でここにいてるって事も出来るんだ」

ベリルはそれに喉の奥から笑いをこぼした。

「良い案だ」

呆れてティリスを一瞥したりユートは次にベリルに視線を移す。

「あんたは元の世界に戻りたくない理由でもあるのか？」

「いいや、年を取りたくない理由が無いだけだよ」

何かを含んだ物言いにリユートは眉をひそめた。

「さて、解ったのなら準備を進めてくれ。勝手の違う世界だ、入念にな」

その勝手の違う世界でどんな準備をすればいいのやら……ティリスは1人、悩んでいた。

「うーん……」

全体的に見るとあたしたちの世界とあんまり変わらない感じがする。

「だったら、いつもと同じ準備をすればいいのよね」

鼻歌交じりに準備を始めた。

ベリルはというと……持っていたバッグの中身を確認した。

飛ばされる時に足に接触していたため一緒についてきたようだ。

使えるものと、そうでないものとに分けなければならない。

この世界に来て時計が機能しない事に気付いた。カウント式の制限発火装置は置いていくとして、プラスチック爆弾の原料であるC

- 4（シーフォー）は使える。

C - 4とは粘土タイプの爆薬の事である。しかし、この爆薬は起爆装置か雷管を必要とする。

「ふむ」

やはり置いていくか……遠距離から起爆させられる物は生憎バッグに入れていなかった。

普通に火をつければ固形燃料として使用出来るが主成分に毒性が

ある。煙を吸い込むと危険だ。

そして『レモン』と呼ばれる小型の手榴弾にライフルとショットガン。そのカートリッジに弾倉^{マガジン}。

「……」

ベリルはその中の黒い物体に眉をひそめた。

「使えるかな？」

それはスタンガンと呼ばれるものだ。確認のためスイッチを入れてみると激しい音が響き渡った。ニヤリと口の端をつり上げてスイッチをoffにする。

自分の武器の他にムチや弓矢なども用意させた。もちろんベリルはそれらも使いこなす。

出発の日までコルコル族の使う弓矢に慣れる訓練をして前夜に食料などを1つにまとめておく。

それを運ぶのはシャノフの役目だ。馬に荷台をつなげて目的地まで同行する。

出発の朝――すっかり慣れたカルクカンにティリスは飛び乗った。

「お姉ちゃん！ これ」

子どもたちが青い石のペンダントを差し出す。

「我々のお守りです」

レキナがそう言って小さめの馬にまたがった。

「ありがとう」

「ベリルも！」

「リユートにいちゃんも」

それぞれお守りを受け取り一同は人々の祈る声を聞きながら東に向かった。

好奇心旺盛なティリスは目を輝かせている。

「！」

ベリルが何も無いフリをしてリユートに近づき口を開いた。

「ガラムとシャズネスの魔女は本来、この付近にはいないそうだ」
「！」

ベリルは目を細めて薄笑いを浮かべる。

「ガラムはティリスの力に、シャズネスの魔女は私を狙った」

それはつまり、あそこにティリスを残したとしても安全では無かったという事……リユートは苦い顔になる。

「出発を早めた本当の理由はそれか」

「勇者が疫病神になりかねない」

それに一番、心を痛めるのはきつとティリスだ。

「我々はこの世界では異質の存在だからな。そこに吸い寄せられるのかもしれない」

この旅、容易なものではないかもな。

「……」

ベリルの言葉にリユートの目が陰しくなった。

「まあそれはそうと、さっそく怪しいのがお目見えだ」

「！」

リユートはハツとして眼前に広がる砂地を見た。みんなが立ち止まる。かなりの広範囲と窺えた。

迂回するよりも突っ切る方が近道に思えるが……などと考えている間にベリルがカルクカンから降りて荷物を降ろしている。

「？ 何をするつもりだ」

いぶかしげに見ているリユートに小さく笑って自分のカルクカン
を砂地に進ませた。20mほど進ませた処でベリルが指笛を鳴らす。
その音に、カルクカンがベリルの元へ走ったその時――

“グオオオオウウ！”

「！？」

大きな何かが飛び出してきた。

「……」

ティリスもリユートも目を丸くしてその巨体をじっと眺める。

巨大な大木を思わせる胴体に手足は無く、先端はストローのよう

に開いた口……そこにはびつしりと鋭い歯が並んでいた。

見えているだけの長さで10mは軽く超えている。砂の中にはあとどれくらいのか見当もつかない。

「キヤリオン・クローラーといった処か」

ベリルが呑気に口を開いた。すでに戻ってきたカルクカンに褒美のエサを与えて首をさすってやる。

「じゃ、迂回という事で」

ニコリと笑って荷物を再び積みカルクカンに飛び乗った。

その間も獲物を食べ損ねた巨大ワームは悔しさなのか、雄叫びを上げながら海で飛び跳ねる魚のように砂地獄の中を泳ぎ回っていた。その光景を呆然と横目で見やり一同は迂回する。

*オアシスの女神

「いつのまに調教したんだ」

「お前たちのも調教してあるぞ」

呆れたようにつぶやいたリユートにベリルはしれつと応えた。

「この先に湖があります」

「わ、ホント？」

リユートは喜ぶテイリスを一瞥し小さく溜息を漏らす。

神官戦士であるテイリスは1日1度はみそぎ（体を清める事）を行う習わしがある。旅をしているとそれが出来ない場合もあるのだが、可能な限り彼女はそうするようにしていた。

リユートにとっては面倒でもある一方、男しての葛藤も同時に巻き起こる頭痛の種でもある。

夕暮れ近くまで馬を進め夜になると交替で番をしながら寝る。そうして2日後、オアシスのように木々が点在する湖が視界に入ってきた。

「やゝ、やっと体を洗える。毛の間にホコリが入って参ってたんだ」
シャノフが言いながら水浴びの準備を始めた。女性であるテイリスはリユートたちと少し離れて水浴びする事になった。

「魚もいますから捕って昼食にでもしましょう」

「確かに埃まみれだ」

ベリルは脱ぎながら乱暴に服をはいた。そして水浴びをしようとしないうちにリユートを一瞥する。

服を脱ぎたくない理由でもあるのかな？

「入らないのか」

「……俺はいい」

あえて聞いてみると予想通りの答えが返ってくる。

「ふむ……」

ベリルは考えながら水浴びを始めた。

「……」

ティリスに気配を配りながらリユートはベリルたちの水浴びを視界全体でぼんやりと捉える。

「やっぱり入れ。衛生的に良くない」

「わっ!？」

いつの間にか背後にいたベリルに湖に蹴り落とされた。

「きさま!」

水から飛び上がりベリルに声を張り上げる。

「そのまま服脱いで洗え」

歩きながら後ろ向きで言い放つ。

「!」

リユートはその姿にハツとする。

その異様さに……傷が1つも見あたらない。傭兵と言っていた彼の体のどこにも傷痕が無いのだ。

「服を着て水浴びか? 器用な奴だ」

「誰のせいだと……」

「いいから脱げよ。私は少し席を外す」

言って上着を肩にかけ上半身裸のままどこかへ歩いていった。

その頃——ティリスは鼻歌混じりに水浴びの最中だ。青い空に雲が流れているのを嬉しそうに見つめる。

顔立ちのイメージよりも大きな胸は、これからの成長を十分に期待させる。

「ふう……」

落ち着いたように溜息を漏らして水から上がり、ゆっくりと着替えを済ませ剣を手にとろうとした。

「!」

その剣の上に40cmほどの蛇がのたうっている。

毒蛇!? 思った刹那、蛇がティリスに向かって飛びかかってきた。噛まれる! しかし蛇は誰かの手によってそれは阻まれる。

「！ベリル。ありがとう」

「いや」

笑ったベリルを見た瞬間――

「キヤー！ 噛まれてる噛まれてる！」

「ああ、気にするな」

ポイと蛇を捨てた。

「毒無いの！？」

「知らん」

「知らん！？ 知らんってどういう事よ！？」

「座って！ 治癒魔法を……」

「心配ないよ」

クスツと笑って落ち着かせるように一緒に座る。

「いや、心配ないじゃなくて！ やっぱり毒があったんだ！ ベリルの噛まれた手の傷がみるみる黒く変色していく。」

「まあまあ、落ち着いて」

「は、早く治癒を……」

かざしたテイリスの手に左手を添えてそれを制止した。

「お前に言っておく」

「え？」

微笑んだベリルの口からとんでもない言葉がつむがれた。

「私に何があっても治癒する必要は無い。一切だ」

「な……何を言ってるの？」

そしてハツとする。

「彼が上半身裸である事に……怪我人の治癒を行う彼女にとってそれ自体に驚きは無い。」

「が――その肌に目が離せなかった。きめ細やかな肌には何一つとしてその色合いを邪魔するものは無く見惚れてしまうほどの体型だ。」

「解ったな？」

その声にハツとしたが少女は首を横に振って少し声を荒げた。

「解らない！」

「何をしている」

振り返ると、眉間にしわを寄せたリユートがそこにいた。

上半身裸のベリルの手を握っているティリスを見ればそういう顔をするのは当然かもしれない。

「リユート！ ベリルが毒蛇につ……」

「覗きに來たんだが残念、着替えたあとだったよ」

その言葉にリユートはギロリとベリルを睨み付けた。

「あつ……」

離れていく手を目で追うティリス。しかし、その手の傷はすでに治りかけていた。

「……うそ」

見惚れた体を思い起こす。その理由を——記憶にあるのは傷のない体。

『治療する必要は無い』

そう言ったのは……それに関係あるの？

などと真剣に考えているティリスをよそに、1人離れたベリルは木に手をつけて喉の奥から笑っていた。

「ク……ククク。若いな」

リユートの顔にベリルは必死に笑いをこらえていたのだ。彼女の視界に入る処では必死に平静を装っているようだが、周りにそれが気付かれていないとでも思っているのだろうか。

とことん色恋沙汰に“うとい”ベリルが解ってしまう程だというのに……人をおちよくる事が好きな彼女にとってリユートはかつこうの獲物だ。

「何をしていたんだ？」

リユートが再び問いかける。

「だから、ベリルが毒蛇に噛まれたから治療しようとしたの」
その言葉にピクリと反応する。

しようとしたという事はしていないという事……だが、すれ違った奴の手の傷は軽い切り傷程度だった。

毒が利かない？ いや、そんな生やさしいものではない……傷痕すらも消えてしまうのだ。

「奴は……不死身だともいうのか」

つぶやいた自分の言葉にハツとした。

傷痕1つ見あたらなかった体——信じられない事を言った己の言葉に違和感すらも覚えなかった。

まさか……本当にそうなのか？

「どうしてさつき怒ってたの？」

「え？」

ティリスがリュートを見上げて問いかけた。

「あたしがベリルの手を握ってた時」

「そつ……それは……」

「それは？」

期待する目がリュートを見つめた。

「覗かれてあいつが殴られたのかと思ったんだ。お前の平手はモンスターも倒せ……」

「失礼ね！」

ティリスのビンタが炸裂した。

2人が戻ってくるとレキナとベリルが湖に釣り糸を垂れていた。

「この湖には大物がいるんです」

「釣れたらムニエルにでもしてやろう」

ベリルの言葉にティリスがぴよこつと反応する。彼女はベリルの作る料理が気に入ったようだ。

そんなベリルの竿先が揺れた。

「お？」

と、竿を引いてみる——

“ドッパアアアーン！”

「……」

予想より遙かに巨大な魚にティリスとリュートは言葉を失う。

「大物でしょ？」

「糸は持つのか？」

「心配いりません。ルルカ蜘蛛の糸で作った釣り糸ですから。もちろん竿と針も特別製です」

「……」

いやまで、そういう問題の大きさじゃなかったぞ……リュートは無言で2人を見つめた。

全長5mはあろうかという巨体。次に飛び跳ねたその時――

“スターン！”

と小気味よい音を立てベリルの投げたダガーが見事に魚を突き刺して、しばらくは抵抗していた巨大魚も最後はプカッ水面に浮かんだ。

「弱るのを待つてられるか」

「さすがベリル様」

それをレキナが引き寄せた。シャノフは包丁を手にして嬉しそうだ。

「今日の分を採って、残りは干して保存食にしましょう。この魚はヒヤノって言うてとても美味しいんですよ」

「……」

リュートは眉をひそめた。

何かがおかしい……なんだこの光景は？ 普通に馴染んでるこい

つはどうかしている。呆れて顔を手で覆った。

「生でも食べられますよ」

「！ ほう」

ベリルは少しナイフで切り取るとパクリと口に含んだ。

「ん、まあまあ。スズキに似た味だ」

「美味しい？」

「ティリス！」

リユートは慌てて止めに入った。好奇心だけは旺盛なやつめ！

* 永劫の化け物

昼食はベリルの手料理でシャノフはその調理を見てメモしていた。湖に落とされ濡れたリユートの服は木にかけられ乾かされている。替えの服はコルコル族の女性たちが出発までの間に繕ってくれたのだ。

食事を済ませ一同は旅を再開した。

「この先に少し切り立った岩山があります。でも小さいので2日で超えられると思います」

レキナは遠方に見える山を指さした。

「岩山か。お約束なら恐いモンスターが顔を出しそうだ」

「あ……」

ベリルの言葉にレキナが思い出したような声を上げる。

「何かいるのか」

「キャノムがいたかも」

問いかけたリユートにシャノフが応えた。

「キャノム？」とテイリス。

「とっても恐い奴です」

「迂回出来ないのか？」

「そうしたいのは山々なんですけど、そうすると3倍くらいかっちゃうんですよ……」

訊ねたリユートに困ったような表情でレキナが発する。

「辺りを警戒して進むしかないな」

仕方がないというように小さく溜息を吐き出してベリルが決定の言葉を告げた。

岩山の入り口——モンスターがいると聞いているからか足取りは重い。

「で、そのキャノムとは？」

訊ねたベリルにレキナが近くにある岩を指さした。

「大きなモンスターです。ほら、その岩くらい」
それは直径3mほどだった。

「凄く凶暴で肉食なんです。真っ黒い体で……でも滅多に出る事は無いので大丈夫ですよ」

「ほう……滅多にねえ」

笑っていたレキナがベリルの言葉で他のみんなの表情に気が付く。

「？」

恐る恐る前を向くと……

「うそ……」

「あんたがお約束なんて言うからだ」

「私のせいなのか？」

「とにかくなんとかしなきゃ！」

ティリスの声がうわずる。

ベリルがカルクカンから飛び降りるとその動きに反応してキャノムが彼に狙いを定めた。

「！」

自分に注意を引いたのか？ リュートはとつさに察してティリスたちを離れた場所に誘導する。

そして自身もカルクカンから降りて剣を抜いた。言われていた大きさよりもやや小さめだ。それに少しほつとする。

リュートは気付いていた。このモンスターが見ていたのは自分だと……

「今度は俺の力に誘われたか」

つぶやいてキャノムと対峙しているベリルをキャノム越しに見やる。

「……」

奴の戦い方も気になるが……この狭い場所で悠長にもしてられない。加勢に向かおうとしたリュートの耳にレキナの声が響く。

「気をつけてください！ あいつの唾液は強力な酸です」

「！ 何？」

「……」

ベリルは魔獣の紫の目を一瞥しその口元に視線を移した。したたり落ちる唾液が地面にたどり着くと、ジュ……という音が微かに聞こえた。

こいつは厄介だな。むやみに暴れられては問題だ……エメラルドの瞳を細めた。

「うわ！？」

レキナの声にリユートが振り向く。

「！」

そこにはもう1体のキャノムがリユートを見据えていた。ひと回りほど大きい。

「リユート！」

「来るな！」

一緒に闘おうとしたティリスを制止する。この狭い場所で3人が闘うのは無理だ……1人1体を相手にするしかない。

リユートはキャノムをじっと見つめた。豹を思わせる顔つきに黒い体は強靱で生半可な剣では傷を付けられそうにない。

ベリルとリユートは互いにキャノムと向き合う。

「……」

あの体を剣で攻撃するのは私には無理だ……ベリルはキャノムに目を合わせ視線を離さなかった。腰の銃に意識を移す。ハンドガン

狭い谷間に風が吹きそれが合図になり闘いは開始された——大きい方のキャノムがリユートに襲いかかる。

青年は爪の攻撃をひらりとかわしてその体に刃を走らせた。

「！ チッ……」

思わず舌打ちする。この程度の攻撃ではかすり傷にもならないようだ。

「グルワオウ！」

「ガルル……」

目の前の獲物に目が血走っている。

「……っ」

ティリスはレキナたちを守るようにその光景を見つめた。

スキについてリユートは剣を振り下ろす。しかし虚しく弾かれてしまった。

「なんて硬さだ……」

使うしか……無いのか？ しびれる腕に手を添え目を細めた。

一方、ベリルに襲いかかったキャノムは彼の動きに警戒心を強めていた。剣で攻撃するでもなく、己の爪と牙を素早く確実に避ける彼の瞳は決して揺るがずに見据えてくる。

今まで感じた事の無い感覚——1人と1匹は再び距離を保ちつつ睨み合った。

「リユート……」

大丈夫よ、きつと……だから、ためらわないで……ティリスはリユートのためらいを感じていた。

「グワオ！」

ベリルと対峙していたキャノムが意を決したように襲いかかる。

「！」

頭を守るように出した左腕に強く噛みついた。

「ベリル！」

「！」

叫んだティリスの声にリユートが反応する。

「ガルア！」

「！」

キャノムはその隙を見逃さなずリユートに飛びかかってきた。

その時——閉じられていた右のまぶたが開き黄金の瞳が現れる。それを合図にまるで鳴いているかのように山が震えていた。

「ギャン!？」

すさまじい風がキャノムを切り裂く。

「リユート！ ベリルをつ」

ティリスの声と共に右目を再び閉ざし、その方向を見た。

「……っ」

ベリルは腕を噛ませたまま静かに冷たい瞳を向ける。腕はその酸により溶け始めていた。ゆっくりと腰から銃を取りだし魔獣の下あごに銃口を突きつける。

ひきがね 引鉄を三度引くと同じ回数の破裂音が山に響き渡った。弾丸は脳にまで達しキャノムは声もなく崩れ落ちた。

「ベリル！」

ティリスが慌てて駆け寄るとその腕は痛々しい程に無惨な有様だった。

「必要無いと言ったはずだ」

力を使おうとしたティリスに睨みを利かせる。

「でもっ……！」

言い返そうと口を開いたティリスだったがベリルがふらりと体を傾けた。それをリユートが支える。

「……意識を失っている？」

反応の無いベリルを道の脇に寝かせた。

「……」

状態を探るリユート。

「痛みで気絶したのか」

「……」

彼の言葉にティリスは腕を見つめた。これだけの酸による浸食……

……意識を失うのも当然だ。

しかし――

「凄いな」

リユートは薄笑いでつぶやく。腕のただれが見る間に治っていくのを目の前にして不死身なのだと確信した。

「……っはあ」

ベリルが意識を取り戻す。

「あんだ、不死身なのか」

「不死だよ」

言って上半身を起き上げた。

「まだ表面だけだ。内部は完治していない」

ベリルは確認するように腕をさすり小さく笑って話を切り出した。

「そろそろ隠し事は止めにしないか？ お互い」

「……」

リユートの目が陰しくなる。

「あ、あたしが……」

「いいんだ」

代わりに言おうとしたティリスを止めてベリルを見据える。そんなリユートに人差し指を立てた。

「全てを話す必要は無い。理解出来るだけの符号のみで構わん」

「……」

そんな事を言われても……リユートはどう説明していいものか悩んだ。本当に話してもいいのだろうかと話すのを静かに待っているベリルを一瞥する。

躊躇しているリユートにベリルはにこりと笑いかけた。

「村にいた時、風呂場を……」

「俺は普通の人間じゃない」

「そんな事わかつとる」

「ティリスとは……違う力を持った人種だ」

「どんな人種だ」

「……」

黙り込んだリユートに浴びせるひと言。

「風呂場」

「……卑怯だぞ」

「さて、何のことやら」

苦い顔で睨み付けるリユートから視線を外してとぼける。

「さっきからお風呂場がどうしたの？」

ティリスは首をかしげた。

「いいから、お前は黙ってろ」

ベリルはそんなリユートを一瞥し、ティリスに視線を移して意地悪い目をした。

「実はな……」

「！ “魔族” と言ってわかるか」

「細かい説明ははぶけよ」

回りくどい言い方に、ベリルは念を押すように言った。

「……魔闘気という特有の力を持つ。解放するとああなる」

リユートは苦虫を噛み潰したような表情で応える。

「他には？」

「風を操れる。ただし、魔族化しなければ大したことはできん。…

…これで満足か？」

「いまいち解らんな。人間との決定的な違いは無いという事か」

ベリルは思案するように小さく溜息を吐くと、つぶやくように発した。

「普通の人間にはない力だ」

リユートの言葉に眉をひそめる。その顔は『それだけ……？』といった感じだ。

「んで？ 橋の下で生まれたりとかするの？」

「……それは捨て子じゃないのか」

「じゃあキャベツから生まれる？」

「生まれるか！」

語気を荒くしたリユートにベリルは薄笑いを返した。そして――

「では、私のようにガラス管からは？」

「！？」

「ふざけるな」

少し怒った顔をしたリユートにニツと笑ってさらに口を開く。

「実は100年以上生きてるとかも？」

「おちよくるのもいい加減に……」

ハツとして言葉を詰まらせた。汚れた左腕を見る……視線を合わせ静かに問いかけた。

「あんたは何者だ？」

その質問にベリルは目を細める。そして彼の口からつむがれた言葉は、およそ2人には信じられないものだった。

「25で不死となり120年経つ。それまではごく普通の“人工生命体”だ」

「え……」

「何……」

先の言葉が出ない。凝視する瞳にもベリルはただ笑っているだけだ。

「……っ」

人工つて……人に、作られたの……？ テイリスは息を呑む。

「あんたの世界では……ごく普通なのか」

リユートは固まった少女を横目に映し、いぶかしげに発した。

「生憎、成功したのは私だけだね」

肩をすくめて応える。

「！」

「……」

「という訳だ」

言葉を失った2人に小さく笑い視線を外すとレキナとシャノフが口をあんぐりと開けて啞然としていた。

「……」

ああ……そういやいたっけな。2匹の事をすっかり忘れていた。とりあえず着替えようと荷物を取るために立ち上がる。

「べ、ベリル様が人に造られたなんて……」

レキナが目を丸くしてつぶやく。あまりの衝撃にリユートが魔族だという事はスルーされていた。

否、気に留める事柄では無いのだろう。少なくともベリルにとっては――

* 炎のゆらめき

レキナたちは岩山を越え森に入る。広い間隔で生える木々、荷車でも通れるようだ。

「この森は女神に護られています。安心して抜けられますよ」

湖で釣り上げた魚の干物を夕食にその夜はベリルが火の番をする。

「……」

パチパチと森に響くたき火の音にベリルは目を閉じて深呼吸をした。

森の女神……それは、この場所が聖なる力に満ちているという証。よってモンスターは立ち入る事が出来ない。

「！」

そんな彼の横に静かにティリスが腰掛けた。それを無言で見つめる。

「あたしね、リユートが好き」

少女はベリルに目を合わせず目の前のたき火に小さく笑った。

「！」

笑ってすぐに表情が曇る。

「あたしたちの世界じゃ、魔族は人間の敵なの。リユートは半分、人間だけ」

その後の言葉が出なかった。どう伝えればいいのかがまとまらない。

*言い訳していいですか？

「だから……っ、だからリユートは……あたしの言葉、信じてくれない」

「……」

ベリルは黙ってたき火を見つめる。

彼女が発した言葉はとても重たいものだろう。例え人間との混血^{ハイフ}だとしても魔族である事には変わりはない。

彼が服を脱ぎたがらなかった理由と結びつく。

「あなたは辛い事とか、無かったの？」

当然の問いかけだ。

「無いと言えば嘘になる。何度も捕らえられ体をいじり回されもした」

質問を投げかけたティリスに優しく微笑んだ。

「！ 人間が憎くはないの？」

「それは私を造り出した者たちの望むものではない」

柔らかだが凜とした言葉だった。

「例え許されない存在であると認識していても自分の存在が否であると感じていない。それは私を造り出し私のために己を犠牲にした者たち自身までも否となるからだ」

今までの彼からは見た事も無い表情が浮かぶ。これが本来のベリルなのかもしれない。細かな色合いは異なるけれどリユートと同じ癒しの色をした瞳……

「暗く生きるのも明るく生きるのも同じならば、どちらが良いのか。解るだろう？」

「うん」

「お前が奴のためにここににいるのなら、奴もまたお前のためにここにいるのだ。私はお前たちのためにここに在る」

「……」

ティリスは彼の雰囲気亡き父を思い浮かべる。優しく包んでくれた父の腕を……

「！」

少女は無意識にベリルに抱きついていた。

小さな声で「……お父さん」と微かに耳に届く。ベリルは何も言わずにポンポンと軽く背中を叩いた。

しかし——ヒヒシと怒りのオーラがベリルの背中に突き刺さっていた。

「……」

私が悪いのではない……心の中で言い訳してみる。

朝——旅支度をする一同。心なしかリュートの視線はベリルに痛かった。

「あのっベリル……」

「ん？」

ティリスが申し訳なさそうに近寄ってくる。

「ごめんなさい……あたし、あのまま寝ちゃって……」

「ああ、構わんよ。同じ体勢で寝るのは慣れている」

言ったベリルに思慕の目を向ける。

「……」

だから！ これは違うというのに！ ベリルは後ろからの鋭い視線に声を張り上げたかった。

そうして森を2日で抜けて平原に出ると一面に広がる背の低い草と点在する岩……どこにでもある風景が視界を支配した。

「ここら辺で昼飯にするか」とベリル。

「では僕がウサギでも狩ってきます」

レキナは弓を持ち駆けていった。シャノフは鼻歌交じりに準備を始める。

「……」

そんな光景を横目に、何やら言い争っているリユートとティリスをベリルは見つめた。

「？」

何を言い争っているのだ？

少し近づく。すると――

「何よ！ 何がいけないっていうの？」

「誰にでも懐くな。敵が出てきたらどうする。お前がよりかかっていたら動けない」

「ベリルならそういう時は気兼ねなんかしないもん」

「！」

およ？ こいつはヤバイ。私のせいで喧嘩しているようだ。森での出来事から2日は経っているというのに今頃どうしてそんな話になっているのだ？ ふとした会話からそっちに発展でもしたのだから。ベリルは溜息を吐き出しどうしたものかと思案した。

「ベリルなら……？」

ぴくりと眉を寄せる。

「お前は……。っ！？」

声を張り上げた瞬間――足に何かがぶつかった感覚がしてガクンと膝が折れた。そのまま地面に倒れ込む。

驚いて足に目を向けるとそこにはニッコリと微笑むベリルの姿があった。

「おや、足は弱いのかね？ まだ若いのに」

気配を消して近づきリユートに足払いをかましたのだ。

「……っ！」

リユートは怒鳴りかけたが、ずっと彼におちよくられ続けている事もあるのがバカバカしくなった。

いちいち相手してられるか……リユートはプイと顔を逸らした。

「まあまあ、落ち着いて。私は年齢からして父親みたいなものだ」
笑って寝ころんだまま肘を突いて頭を乗せる。

「『父親』じゃなくて『おじいちゃん』だろ」

「リユート！」

「ハッハッハッ。確かに」

そうしてティリスに視線を移した。

「シャノフの手伝いをしてやってくれないか」

「わかった」

素直に駆けていく後ろ姿を見送り片膝を立てて座っているリユートを見やる。

「そう怒るな」

「あんたには関係ない」

「私が喧嘩の発端なのにか」

言われて青年はギロリと睨み付けた。

「信用無いなあ」

「あると思うのか」

今も寝ころんで口の端をつり上げているベリルに言い放つ。

「もうちょっと笑ったらどうだい？」

「面白くもないのに笑えるか！」

その瞬間——ベリルはガバツと起き上がり素早く彼の背後に回った。

「！？」

「これならどうだい！」

脇の下に手を伸ばす。

「わはははっ！？ ……くっ ……う、はっ ……」

「お？ 我慢強いな。 ……ん？」

気が付けばティリスがその光景を眺めていた。その目は何故かキラキラしている。

「？」

怪訝な顔でベリルはその視線を追った。

「……ああ」と気が付く。

必死に何かをこらえている姿は耐える男として映るものだ。ティリスはリユートの耐える姿にトキメいていた。

もうしばらくトキメかせてやりたいが、これ以上はリユートが可哀想だなとベリルはすいと離れる。

するとティリスは残念そうにシャノフの処に戻っていった。

荒い息を整えながらベリルを睨み付けるリユートに薄笑いを返し、またゴロンと体を横たえて肘を突き頭を乗せる。

「ちよつとは笑えたか？」

「ふ、ふざけるな……」

うーん……私は彼に睨まれてばかりだな。などとベリルは呑気に考えた。

「まだ何か隠してるだろう」

「！」

おもむろに切り出されリユートは少し驚いてベリルに目を向けた。目だけが笑っていないベリルのその瞳に絡め取られ視線を外せない。体が強ばっているのが解る……ベリルが元の表情に戻ると一気に脱力した。

* 作戦会議

「！」

そしていつもの意地悪い表情を浮かべたベリルにピキツときて、彼が何か言おうとするのをさえぎった。

「言いたいなら言え！」

ベリルはキョトンとした表情をしたあとニコリと笑った。

「そうか。テイリス！」

「何？」

振り返る少女にリユートは内心ビクついている。

「風呂場のドアを壊してしまったのだが支障は無かったかね？」

「え？ ああ、あれ前に誰かが壊したって言ってたよ」

「そうだったか。それだけだ」

「……」

目を丸くした青年にゆっくりと振り返る。

「何を言うと思った？」

ニヤリと笑った。

「このクソジジイ……」

レキナが狩ってきたウサギをベリルがさばき、ウサギのスープとヒヤノの干物で昼食を済ませベリルはボナパスの絵をじつと眺めた。

「どうやって倒すか……」

ぼそりとつぶやく。

「炎を吐くのよね」

「これは推測だが」

ベリルは自分の考えを切り出す。

「2つの頭のどちらかが主導権を握っていると考える」

「……主導権？」

リユートが聞き返した。

「頭は2つだが体は1つなのだ、上手く動けるとは思えん」

「つまりどういう事？」

ティリスが首をかしげ、リユートが応えた。

「どちらかが偽物という事か？」

「おそらく『砲台』ではないかと」

「砲台……ですか？」

今度はレキナが首をかしげた。ベリルはハンドガンで2丁抜いて説明を始める。

「2つ同時に照準を合わせるの難しい。だが威力は数倍となる。どちらかをメインに据えてもう片方を適当に放てばいいだけだ」

そして左手のハンドガンを仕舞いながら続けた。

「だからといって片方を潰せば良しという訳でもない。それが砲台であつた場合、メインの照準だけに集中出来る事になる」

「危険なのは砲台の方を先に潰す事が……」

リユートが苦い顔になる。

「体表面の強度も気にかかる」

ベリルは目を細めた。そしてパツと笑顔になりティリスを見やる。

「お前たちは離れた処で待機ね。私とリユートで闘うから」

「えっ!？」

ティリスは驚いて声を上げた。

「レキナたちを護ってやってくれ」

「どうして!？」

納得出来ない様子で拳を握りしめる。

「相手を考えて言っている。お前がいては我々は上手く動けない」

ベリルは彼女に厳しい目を向けた。

「……っ」

指揮官としてのベリルの瞳にティリスは何も言えなくなる。

そして作戦会議を一端、中断して休憩に入る。

しょぼくれているティリスにベリルは静かに近寄った。

「そうスネるな」

「だって……っ！」

言葉を詰まらせたティリスの隣に腰掛ける。

「1つ聞くが」

「！ 何？」

ベリルはハンドガンを出し弾倉を抜いてカートリッジを1つ見せた。

「これに魔法を付与出来るか？」

「出来るよ」

カートリッジを受け取りベリルに顔を向ける。

「何を付ける？」

「そうだな…… 水などは？」

「大丈夫」

ニコリと微笑みカートリッジを見て口の中で何かをつぶやいた。すると淡く一度輝いて光を失う。

「はい」

「すまん」

手渡されたそれを弾倉に戻し10m先の岩に引鉄を引いた。岩にぶつかった弾丸は青い光を放ち予想よりも破壊が大きいと窺える。

「！ ほう……」

感歎の声をあげる。そして別の弾倉を取り出しそこに入っていたカートリッジを全てそこから出すとティリスに手渡した。

「急いで付与しなくて良い。これに頼む」

「……」

ティリスは手のひらのカートリッジを見つめて表情をほころばせる。

「うん」

その声にベリルも笑顔を返した。

「お前を待機させるのは回復としても期待しているからだ」
「！」

「治癒は必要無いと言ったがボナパス戦ではそうはいかないだろう。止まっている暇はない」

連携が鍵を握る……ベリルはエメラルドの瞳を輝かせた。

「ま、私はまだ彼に信用されていないようだがね」

言ってレキナたちの手伝いをしているリユートに視線を移す。

「ベリルって……沢山、闘ってきたの？」

少し不安げな面持ちにベリルは視線を外し遠くを見つめた。

「いつか私を必要としない時が来る事を願っているよ」

真っ直ぐに、揺るぎない眼差しは殺し合いを楽しむ者の目ではなかった。

「……」

この人もリユートと同じ、人を傷つけないんだ……それが解ってテイリスは安心した。

「晩飯はパンケーキでも作ってやろう」

「！ ホント!？」

「生クリームは付けられないがね」

ウインクする。テイリスは満面の笑顔で手を合わせて喜んだ。

「……」

ベリルは“しまった”と薄笑いで目を据わらせた。リユートが2人の様子をちゃっかり遠目で見ていたからだ。

彼の視線が痛い……溜息を吐き出してベリルは肩を落とした。

「……」

リユートの元へ駆けていくテイリスの後ろ姿を見つめる。

彼がベリルに隠しているであろう事柄——ベリルはそれを推測していた。キャノム戦のあと平静を装っていたようだが明らかに今までの疲労とは違っていた。魔族化には何かしらのリスクがある？

力の解放のあとの疲労……簡単に考えるなら、そう何度も力を解放出来ないという事だ。私を信用出来ない間は隠しておきたいのだとすれば……

「1日1度が限界かな？」

つぶやいてゆつくりとみんなの元へ歩き出した。

兵を上手く動かすコツは兵の状態を観察し、あるいは良い方向に向かわせる事だ。果たして信用されていない状況でそれが上手く機能するかどうか……この先、指揮官としてのベリルの才能が活かされるのかはまだ解らない。

暗くなるまで馬を進め、ベリルは約束通りティリスにパンケーキを焼いた。近くの木に蜂の巣をレキナが見つけてハチミツを採りパンケーキにかける。

青白い月が草原を照らす——パチパチと、たき火の音と虫の鳴き声。月が出ているため星はひかえめにその輝きを放っているが美しかった。

「……」

眠りに就いた一同から少し離れてベリルは微かに吹く風を静かに感じていた。

閉じていた目を開き右手を軽く空に向けた。その姿は月の光に照らされて幻想的に浮かぶ。

短い金色の髪は金細工の糸のよう……その瞳は神を飾るエメラルド。

天を仰ぎ小さく笑う。ベリルはオーストラリアの大地を思い浮かべていた。

いにしえの精霊が宿る大地——先住民アボリジニたちが神々を生ま出し、共存していた大地……ここはその大陸に似ていた。

一度大きく呼吸してみんなの眠る場所に戻っていった。

*事前確認

あと数日も進めばボナパスの住む洞窟がある林にたどり着く――
ベリルは闘いの最終確認を行った。

「我々が先に奴を見つけた場合、まず私が狙撃する。その後リュートが出て奴を攪乱^{かくらん}してくれ」

私はそのまま狙撃を続ける……と岩の上に紙を広げて口で説明しながら記号を書きもって指示を記していく。

「それが無駄か、あるいは状況によって私も接近戦に加わる。ティリスたちは後方で待機」

「先に見つけられた場合は？」

リュートの質問にベリルは薄笑いを浮かべた。

「打開策を探りながら戦闘」

それにティリスたちは眉をひそめる。

「正直、どう闘えばいいのか決めかねている」

肩をすくめてティリスに目を移した。

「回復は短時間で構わん」

「！」

ベリルは小さく笑い片膝に右腕を乗せて続ける。

「治癒が必要と判断した時はお前の元に向かうが完治の方向で考えなくてよい」

彼が『止まっている暇は無い』と言ったのは、痛みで判断力を鈍らせている時間は無い。という意味だ。

* 怒りの化身

「林の外に馬を置いていく。お前たちは馬の番を頼む」

レキナとシャノフは頷いた。そしてベリルはバッグからライフルとショットガンを取り出す。確認して再びバッグに仕舞った。

「……」

ベリルの様子にリユートは目を細める。徐々に増していく緊迫感――

――普段と戦闘時のメリハリをこれほど持つ人間も珍しい。

今のベリルには戦士としての雰囲気しか感じられない。

「お前は怪我したら治癒してもらえよ」
出発の準備を始めたティリスとレキナたちを見やりリユートに発する。

「！」

にこりと笑うその顔にリユートはしかめっ面を返した。

「気兼ねなんかしてる場合じゃないのは解るよな」

「……」

見抜かれている……視線を泳がせたリユートに彼は小さく溜息を吐き出した。

「お前……色々とヘタクソだなあ」

「うるさい！」

プイとそっぽを向いた。

ボナパスの住処に近づくにつれ、みんなの緊張感が増していく。
そしてとうとう――

「……」

目の前の林に険しい目を向けるベリル。

カルクカンから降りて、バッグから武器を取り出し装備していった。ライフルとショットガンは肩に、『レモン』と呼ばれる小さな手榴弾は腰のベルトに……それを見てティリスたちもカルクカン

から降りる。

「ティリス」

「！」

ベリルは彼女に目を向けず指示を出す。

「奴の視界の範囲には入らないように。常に背後寄りにいろ」

「わかった」

張り詰めた空気が場を満たす。

「……」

一通りの装備を確認してベリルは指ぬきグローブをはめ薄笑いを浮かべた。

つくづくだと自分に笑いがこみ上がる。相手がどういう攻撃をしてくるのか……まったく見当がつかないというのに徐々にこみ上げてくる高揚感――

「クク……」

喉の奥から絞り出したように笑う。

「！」

リユートはベリルの表情にギョツとした。恐ろしいほどに輝く瞳

……にやりと口の端をつり上げる表情。

背筋がぞつとした。だがすぐにその顔は奥へと隠される。

そして、いつもの飄々（ひょうひょう）とした面持ちに戻りリユートにニコリと笑みをこぼした。

「……」

こいつには一体、いくつの顔があるんだ。

「あまり大きくはない林のようだ」

ベリルは先に足を踏み入れた。その手にはライフル。どちらが先に相手を見つけるか……慎重に気配を探りながら歩みを進めた。

さほど木々の間隔は狭くない。

これなら剣を振るえる……とリユートは目で大体の距離を測った。
「！」

ベリルとリユートが同時に気付く。

前方にただならぬ気配——ベリルはすぐさまライフルのスコープをのぞき込んだ。

「……確認した。およそ100m先。戦闘態勢に入ってくれ」

言われてティリスはベリルの右に遠く離れ、リユートは左に少し離れて剣の柄を握りしめた。

「まだ遠い……あと20m」

ひきがね
引鉄に指をあてる。

数秒後——ベリルがライフルの引鉄を引くと大きな音と共に弾丸がボナパスに向かって走った。

「ギャオ!？」

弾丸はボナパスの右の頭のこめかみに当たる。その途端、怒りを吹き出したように大地が大きく震えた。

「グオオオウ!」

攻撃した相手をそのオレンジの瞳で必死に探す。

「!」

ベリルの姿を捉え巨体とは思えないほどのスピードで迫っていく。それを確認したベリルはライフルを肩に背負いショットガンを手にした。

左に駆けて30m手前に迫るボナパスに弾丸を放つ。散弾はボナパスの左肩に当たったが、思ったほどの威力にならずベリルは舌打ちした。

すかさず次の攻撃——それは敵の腹部に当たったが同様に大したダメージはなさそうだった。

「……らちがあかな」

ボナパスの攻撃を避けながらベリルは次の策を考える。

「……」

リユートはその後ろを追いかけ、攻撃を仕掛ける間合いを図っていた。未だボナパスは炎を吐かない。

一瞬、立ち止まったベリルに敵は大きく口を開いた。

「！」

右の頭からベリルに向かって真っ赤な炎が走る。かるうじてかわしたベリルの目に左の頭が背後のリュートに狙いを定めているのを確認した。

「チツ」

ベリルはショットガンを肩に右のバックサイドホルスターからハンドガンを取り出し左の頭に向かって放った。

真っ直ぐにボナパスに向かっていく弾丸——それはみごとに敵の左の頭の右目に命中した。

「ガアアアウ！」

水の魔法が付与されたカートリッジはボナパスに悲鳴を上げさせる。

怒りは頂点に達した。ベリルを見据え体を小刻みに震わせる。たてがみはざわざわと逆立ち、残った3つの目はベリルを捉えて離さない。

「……」

ベリルもまたボナパスの瞳を見つめた。それは相手の心を探るように深く深く……静かに呼吸する。

「ベリル！」

微動だにしないベリルの名を呼んだ。

「！」

その声にベリルは寸^{すん}での処でボナパスの爪から体をよじらせてかわした。

「すまない」

「何をしていた」

「奴の心を探ろうかと」

「……で、どうだったんだ」

リュートの問いかけにベリルは薄く笑う。

「あれはだめだな。猛獣よりも始末が悪い」

ベリルが入り込めない心……それは相手に容赦^{ようしや}は必要ないという

事だ。ベリルの瞳は冷たくそれをリユートに知らしめた。

「……そうか」

リユートは一度、目を伏せてボナパスに視線を移した。柄に手を伸ばす。

「ガアアアアー！」

向かってくるボナパスに抜刀！

「！む……」

手に伝わる衝撃はとても硬く以前、闘ったキャノムよりも厄介だと窺えた。その隙にベリルは敵の背後に回り込み引鉄を引く。弾丸は目に攻撃した時よりも威力は下がった。

「！やはり表皮は硬いか」

「……リユート、ベリル」

ティリスは遠くから2人の闘いを見守る。

どうしてあたしはここにいるの……？　こんな処で何してるの？
闘いに加われない事が悔しかった。

「！」

ボナパスの爪がベリルに襲いかかる。

「！ベリル！」

その光景にリユートが声を上げる。左腕で防いだがベリルはすさまじい勢いにはじき飛ばされた。

「……ぐっ」

地面に滑り込む。

「！」

追おうとしたボナパスの前にリユートは立ちはだかった。

「ベリル！」

少女は痛みに唸りを上げるベリルに駆け寄る。

「う……っ」

ベリルはティリスの近くまで飛ばされたのだ。

「！」

治癒しようとしたティリスの手を取り首を振ってウインクする。

「え？」

「こいつに付与を頼む」

少し苦い顔をして『レモン』を見せた。

「もしかして……わざと？」

ティリスはあっけにとられる。

「こうでもせんと奴の目を逸らせん」

普通の人間に出来る事じゃない。その腕には大きな爪痕がくつきり
りと血を滴らせていた。

「出来たよ」

「よし」

レモンを腰のベルトに戻し戦場に駆け戻る。

「……硬い皮だ」

ボナパスの爪と炎の攻撃をかわしながら少しずつダメージを与えていくリユート。

しかし、これでは時間がかかる。先にへばるのはこっちだ。

「……」

リユートは奥歯を噛みしめた。

魔族化すれば……だが、こんな場所ではティリスのいる処にまで被害が出てしまう。

「！」

そこにベリルが戻ってくる。左腕には真つ赤な血の跡。

「どっちの頭がメインだと思う」

「……わからん」

素直な応えにベリルは笑ってライフルとショットガンを地面に置き
ハンドガンを手にした。

「お前は極力、体力を温存しながら闘え」
言って空薬莖をポイと口に入れた。

「！？」

驚くりゅうとににやりと笑う。

*それは風

「簡単なエネルギー摂取だ」

私の体はあらゆる物質をエネルギーに変換するのでね。

「これで傷も回復する」

不味そうな顔をして飲み込んだ。

「面白い体だな」

「私もそう思うよ」

口の端をつり上げボナパスに駆け寄り引鉄ひきがねを引く。これだけのサイズ、外す方が才能が必要だ。

水の魔法を付与された弾丸が敵の体にダメージを与えていく。

「魔法が無かつたら表皮にすらめり込まんな」

その威力に感嘆した。

「ガアアア！」

怒り狂ったボナパスが左前足を大きく振る。

「！？」

「ベリル！」

しゃがみ込んだ頭の上をかすめた。当たらなかった攻撃にボナパスは2つの頭の口を大きく開いた。

ベリルがそれを見逃すハズがない――

“キンツ……”

素早く『レモン』を手にし歯でピンを抜くとそれをボナパスの目の前に投げる。

「リユート！」

「！」

どっちの頭だ！？ リユートは一瞬、悩んだ。

風を巻き起こし、決断したようにボナパスの口の中に――敵はバクンとそれに噛みついた。

数秒後――大きな衝撃がボナパスの右の頭を破壊した。

「ギャウ!？」

痛みでしばらく動かないボナパスの右の頭はすでに原型を留めてはいない。

「……」

沈黙がその場を満たした。

「グルルル……」

「違ったか」

「くっ……すまない」

「気にするな。次がある」

悔しげに発したリユートにベリルは笑って肩をすくめる。

「砲台が1つになったのだ。それで良しとする」

だが……同じ手は通用しない。

「……」

ボナパスは目の前の2人を見つめた。

大きな力を感じるリユートを警戒していたが今までに無い痛みを与えてくるベリルに怒りを沸き立たせた。

「およ……なんかももの凄い怒ってるな」

「気楽に言っな」

ベリルの言葉は緊張を和らげるためのものだ。それが見て取れてリユートは少し笑った。

「足を重点的に攻撃」

「よし」

ベリルよりも体格の大きいリユートだが相手がボナパスなら小柄な方だ。リユートの攻撃に対応しながらもボナパスは隙を見てベリルに炎と爪で襲いかかる。

「戦闘車両に追われている気分だ」

経験が無いとも言えない自分に薄く笑う。

そうしてベリルは持っていたハンドガンを仕舞い左のバックサイドホルスターから別のハンドガンを手にとった。

体を反転させてボナパスに向かって駆ける。

「！」

リユートはそれを見て彼の考えを瞬時に理解した。今にもベリルをかみ砕こうとするボナパスの左後ろ足を力の限り斬りつける。

「！　グオオ！」

ベリルはリユートに頭を向けたボナパスのたてがみを掴みその頭に飛び乗った。銃口を人間でいう、うなじの場所に突きつける。

ボナパスが振り落とそうとした時——銃声が3発、響き渡った。

「ガ……ア……」

ボナパスは小さく唸るとゆっくりと体を地面に横たえた。

「……」

ベリルはその頭を見つめる。近づこうとしたリユートを制止し首元に手を当てた。

「まだ生きている」

「！」

ベリルは目を細めてボナパスの眉間に銃口を押し当てる。

「！？」

終わったのかと駆け寄ったティリスの目に引鉄を引いたベリルの姿が映った。破裂音のあと動かなくなった事を確認しベリルはその頭に優しく手を添えた。

「苦しめてすまなかったな……」

早くにトドメを刺せなかった事を詫びるようにつぶやく。彼が左のハンドガンに込めていたカートリッジは『ホローポイント』と呼ばれるものだ。

それは先端に穴があいているカートリッジ……当たれば弾丸はキノコ状につぶれ、体内にめり込んでから碎ける事もある。貫通せず体内を暴れ回るもので『拡張弾』とも呼ばれる。

『必要以上に苦痛を与える』として戦争では使用禁止とされているカートリッジだ。

ベリルはそれをもしもの時のために数発だけ所持していた。

ホローポイントは戦争以外の使用は禁じられていない。そのため

普通に市販されているカートリッジである。

「……」

ティリスはその姿を見つめる。

命を尊ぶ神官である彼女は彼の様子に沈黙した。

「！ ベリル様、どうでしたか？ ここからでも凄い音がしてましたけど……」

戻ってきたベリルたちにレキナな不安げに問いかけた。

「倒したよ」

「本当ですか！？」

シャノフが笑顔になる。

「帰りは軽装でいこう。荷車は捨てろ、レキナは私の後ろにシャノフはティリスに。乗ってきた馬は何も乗せずに連れていく」

急ぐようなベリルの言動にリユートは怪訝な表情を浮かべた。

「何か急ぐ理由でもあるのか？」

「……」

それに少し苦い顔をする。

「奴は手始めに送られたと推測している」

「え……」

これで終わりじゃない？

「ど、どういう意味ですかベリル様」

カルクカンの手綱を持ちベリルは険しい目を林に向けた。

「奴はあまりにも生物として不自然だった」

生き物としてのごく最低限の意識すら持たず、ただ破壊のみを欲していた。

「本気で無人の車と闘っている気がしていたよ。こんな処にいた意味すら理解出来ん」

「どういうこと？」

「何者かの手によるものだとすれば、まだ奴が存在するという事か？」

リユートの言葉にベリルは頷く。

「同じものだとは限らんが、あれはおおよそ自然に生まれたものは言い難い」

いち早く戻り、もしもの時のために備える必要がある。

一同はその場をあとにして急ぎ集落に戻る事にした。

「……」

リユートは頬に触れる風に目を細める。

「風が……鳴いている」

ぼそりとつぶやく。

それは、何かを暗示していたのだろうか。

それとも気の迷いなのか——無意識に発した言葉の真意は未だわからない。

* 犬すら食わない

早足で戻ってきたため行きの日数で集落に到着した。

「彼らの依頼は遂行した。元の世界に還るかね？」

ベリルはリユートに問いかける。

「……」

青年はティリスを一瞥した。

「そうだな」

「！ リユート」

「あとは私だけで何とかしよう」

「でも……っ」

「リユートだけなら私も言わんが、お前が気にかかる」

「ごねるティリスに笑みを浮かべて発する。

「あたしのことなんて……！」

リユートはぴくりと反応した。

「お前がいても足手まといだ」

「ああ……それを言っでは……ベリルは手で顔を覆った。

「そ、それは……確かに直接戦闘しなかったけど、ボナパス戦みに付属魔法で力になれるもん！」

「次も上手くいくとは限らん」

「そんなの……ベリルが指揮してくれるならきつと大丈夫だよ！」

「あちゃ……そこで私の名を出すやつがあるか。」

「ベリルの言うことなら聞くのか？」

リユートは声を低くした。

「ほらみろ、怒ってるぞ。」

「え？ ……う、うん」

「そのベリルが『還れ』と言っている」

「ベリルは『還れ』なんて言っていないよ！ 『還るか？』って訊いただけで……」

ああ、だからそんな揚げ足を取るような事は……

「同じことだ」

「同じじゃないよ！ 全然違う！」

「お前は元の世界に還りたくないのか！？」

2人の会話に、そこにいる人々は目を丸くして事の成り行きを見守った。

「そ、そうじゃないよ……でもベリルが……」

「俺が……還ると言ってもか……？」

「えっ……」

「ベリルのそばにいたいなら残ればいい。俺は……還る」

フィとテイリスに背を向ける。

すねたのか！？

「リュ、リュート」

テイリスは胸の前で組んでいた手をぎゅっと強く握りしめた。

「あたし……還る！ リュートと一緒に帰るよ！」

言ってリュートのマントの端を掴んだ。

「テイリス……」

「……」

ベリルは生ぬるい笑顔を浮かべる。

嬉しそうな顔をするのはいいがなリュート……周りの奴らは完全に置き去りか。どうしてこれで彼女に隠しきれているのか、はなはだ疑問だ。

「ほらほら、いいから。私に任せて還れ」

苦笑いを浮かべ手の甲で払うようにした。

「……ありがとう」

しばらくしてコルコル族の魔法使いが魔法円を描きその中心にリュートとテイリスが立つ。

「色々ありがとう」

少女はベリルに駆け寄って抱きしめた。

「……元気でな」

別れの時——リユートはただそれを見つめていた。この場面にまで怒るほど心狭くはない。

ベリルから離れてリユートの隣に立つと魔法使いが呪文を唱える。風が渦を巻きだした。彼は2人にひらひらと手を振る。

しかし——

「！ 発動しない!？」

魔法使いが叫んだ。風が収まり辺りは静まりかえる。

「あー、やっぱり何かの力が働いているのか」

ベリルは解っていたように口を開いた。

「どういう事だ」

「もしかするとそうなんじゃないかな」と

眉間にしわを寄せる青年に小さく笑って応えた。

「あんた……解つててやらせたのか」

「予想していたがやってみないと解らんだろ？」

「だったら初めからそう言え！」

「リユ、リユート」

ティリスが青年をなだめるその顔は少し嬉しそうだ。まだみんなと別れなくてすむ事が彼女は嬉しかった。

「何故、解った？」

リユートの問いかけにベリルは空を見上げる。

「ようやく少し大気が読めるようになった。何かのバランスが崩れている」

天候を読み、周囲の空気を読む能力。自然を相手にする者が最も必要とする能力……彼はレンジャーとしての特性を遺憾なく発揮していた。

「……」

どこまでこの世界に馴染んでいるんだ……リユートは半ば呆れる。

「あんた……どこに行っても暮らせそうだな」

険のある言い方に笑顔を返した。

「じゃ、とりあえず食事の支度でもするか」

何事も無かったようにベリルは遠ざかる。

「リユート、いこ」

「……」

笑顔で促す少女にリユートは小さく溜息を吐き出しその後ろを追った。

その夜——リユートとベリルはこれから先の事を話し合った。すでにリユートたちは広場で寝るのが普通となっている。

「バランスが崩れた原因を探れば元の世界に還る算段もつくだろう」
仰向けで両腕を頭の後ろで組み木々の葉の間から覗く星々を眺めながら応えた。

「俺たちが原因ならば、どうしようも無いんじゃないのか？」

「それが原因ならむしろ解決したも同然なのだがね」

「……」

木にもたれかかり両腕を組んで小さく唸った。

「この世界の事をもっと知る必要があるようだ」

誰にでもなくつぶやき「おやすみ」と眠りに就いた。

翌朝——レキナにこの世界の詳細を訊ねる。

地図の左下が今いるコルレアス大陸と言い。右下にあるのが人間の住んでいるエナスケア大陸。

この世界は4つの大陸と天空に浮かぶ大陸の計5つで構成されていて、天空大陸ウェサシスに住んでいるのは有翼人リヤシユカ族。天空大陸は大気の流れにまかせて移動している大陸だとかで、時折この集落の上空を通る事もあるらしい。

「ふむ……」

どういう理屈で浮いているのだろう？ ベリルはそこが気になった。聞いた処で科学的な理由とはかけ離れたものだという事は解っているのであえて聞かない事にした。地図を眺めてレキナの説明に

聞き入る。

「僕たちの世界は全て『マナ』に支えられています」

「偏在する超自然的なエネルギーの事か」

「という事は、大陸が浮いているのもそのマナによるものだな……とベリルは理解した。」

「大気のバランスが崩れているという事はマナが何かしらの理由で揺らいでいるのかもしれませんが」

魔法使いの1人、ステムが口を開いた。まだ若いはその力は目を見張るものがある。人間でいえば23歳くらい。

身長は125cmほどと窺える。毛の色は灰色だ。

ローブに身を包みトネリコの木で作った杖を持っており、その杖にはシャラン……と耳障りの良い音を響かせる銀細工の飾りが付いている。

「マナを調べる必要があるという事か」

ステムの話に両腕を組んで思案した。

「はい、それにはリヤシユカ族の力が必要です」

ステムが頷いて応える。

天空大陸ウエサシスカに住む有翼人リヤシユカ族は最もマナの影響を受けている種族のためマナの変動には敏感なのだそうだ。

「それなら、とくに気付いているんじゃない？」

少女の問いかけにステムが唸りを上げた。

「ええ、ボクもそう思っています。もしかしたら彼らが何か知っているかもしれません」

「そのリヤシユカ族とやらに会えば良いのだが」

「ウエサシスカが今どこにいるのか解らないと無理ですね……」とレキナ。

「ティリスねえたん、遊んでー！」

そんな緊迫感をぶちこわす子どもたちの声。愛くるしさに一同は笑顔を見せる。

「うん」

ティリスは子どもたちの手を取り遊び場へ駆けていった。

「我々はこつちだ」

話し合いは一段落ついた事にして彼はリュートを頭で促す。

「？」

「タダ飯食うつもりか？ デカイ体を活かせよ」

言われてあとに続く。

しばらく歩いて立ち止まった先には……

「！」

「あちこち傷んでいるそうだ」

コルコル族の人々は大工道具を抱え期待の眼差しでベリルたちを見つめた。2人は家畜の囲いや屋根を修繕していく。

屋根に上るのはベリルだ。リュートが乗ると穴を大きくしてしまう。

「ありがとうございます。助かりました」

レキナがぺこりと頭を軽く下げた。

ボナパスの凄惨な攻撃に遭いコルコル族の人々はしばらく何も手に着かなかった。哀しみに明け暮れ「これではいけない！」とレキナは明るく振る舞い、色んな提案をみんなに投げかけた。

その中にぽつりと言った『勇者召喚』の話に父である長老と魔法使いたちが身を乗り出した。

そうしてベリルとリュートたち3人が呼び出された……という訳だ。

ボナパスはコルコル族を襲ったあと他の種族の村や集落を蹂躪しながら東に進みあの林に腰を落着けた。

いわばベリルたちはコルコル族だけでなくこの大陸の英雄となった訳である。

とうのベリルは修繕が終って今はロールケーキを作り始めている……リュートはというと子どもたちと遊んでいるティリスの側に座ってそれを眺めていた。

その時——大きな羽音がして、すぐに何かが落ちる音がリュート

の背後で聞こえた。

「！」

腰の剣に手を添えて振り返るとそこにいたのは翼の生えた人の姿……銀色の髪と縦長の瞳孔の目は淡い水色。身長は190cmほどと長身だ。

説明の時に聞いていたリヤシユカ族がすぐに思い浮かんだ。

「す、すまない！ 長老はいるか？」

息を切らせてその青年は問いかけた。

「一体どうしたんですか？」

レキナがその様子に気遣いながら近づく。

「急いで話さなければいけない事があるんだ！ 長老は……っ」

ティリスも青年の様子に心配になってリュートの側で見つめる。

「長老を連れてきます」

レキナがそう言って駆けて行こうとしたが、それは複数の羽音でさえぎられた。

「！？」

リュートとティリスを翼を持つ数人の者たちが厳しい眼差しで取り囲んだ。

剣を持つ手に力が入る。しかし――

「ぐっ！ う……」

「きゃあ！？」

取り囲んだリヤシユカ族の手にある錫杖ワンドが2人の動きを止めた。

「な！？ これは一体！」

驚くレキナたちにリヤシユカ族の1人がすつと振り返り口を開いた。

「コルコル族の者よ、すまないが彼らはもらっていく」

「どういう事なんですか！？」

「セルナクス！ やめろ」

初めに飛んできた青年が、そのリーダー格らしき男に声を張り上げる。セルナクスと呼ばれた男はその青年を赤い目でぎろりと睨み

付けた。

「マノサクス。裏切るのか」

「！？ そんなつもりは……っ」

濃いグレーの髪をかきあげてセルナクスは指示を与える。

「連れていけ！」

その言葉のすぐ後に閃光が走った――

「うわっ！？」

ベリルが剣を振り上げたのだ。

「これは何の騒ぎだ」

鋭い眼差しを有翼人たちに向ける。

「人間に構っている暇はない」

セルナクスはそう言って風を巻き起こした。どうやらベリルをエナスケア大陸に住む人間だと思っただけらしい。

「む……？」

風の相手をしている間にリヤシユカ族たちは翼をはばたかせリユートとティリスを連れ去っていく。

20mほどの上空に彼らを捉えたベリルはハンドガンを抜き銃口を向けた。

「……チッ」

狙いが定まらずに諦めてハンドガンを仕舞った。

「説明してもらえるかね？」

残された有翼人の青年を見下ろす。

「……」

ベリルの目は決して優しいものではなかった。

* 要石 - かなめいし -

かなめいし
「要石？」

ベリルがいぶかしげに聞き返す。

「ウエサシス力の浮遊を支える要石にヒビが入って、それを直すには強力な力を持つ者が必要だ。って……」

マノサクスはベリルの前にしゃがみ込み、気まずそうに見上げた。
「魔導師が言っただんですか？」

レキナも聞き返す。

魔導師とは北の大陸に住んでいる魔法に長けた種族で、外見は人間に似ているが背は低い。

リヤシユカ族はそんな魔導師たちの中から特に力の強い者を選びウエサシス力に呼び寄せる。ウエサシス力の実権を握っているのは『評議会』と呼ばれる者たちだ。

「で、その魔導師が探し当てたのがリユートたちという事か」

「コルコル族が異世界から勇者を召喚した事はオレたちの間でも広がっていた。まさか彼らが選ばれるなんて……」

それを伝えるために彼は必死に休みも取らずに飛んできた。おかげで翼はボロボロだ。

「ベリル様は選ばれなかったんですね」

「そりゃそうだろう」

「……？」

レキナとベリルの会話に首をかしげるマノサクス。

「で、マノサクス」

「はい」

ベリルはにこりと微笑むとその顔のまま睨みを利かせた。

「回復するのはいつだ」

「え……」

質問の意味の解らない青年に思い切り左足をダン！ と踏みしめ

る。

「私を運べるようになるのはいつだ？」と訊いている」

「なっ！？」 あんたを運ぶだつて！？」

「飛べるのはお前だけだ」

目を据わらせて言い放つ。マノサクスは「信じられない」と言った面持ちでか細く口を開いた。

「……助けに行くつもりなのか」

「他にどんな理由がある」

彼の言葉に驚いて身を乗り出した。

「解ってるのか！？ ウエサシスだぞ？ 人間なんかはどうにか出来ない事くらい解ってるだ……」

「いや、全然」

マノサクスの言葉を切ってベリルがしれつと応える。

「そういう場所なのか？」

「まあ、一番マナが多く集まっている処なので」

ベリルの質問にステムが答えた。

「……魔法使いじゃなくて戦士だろ？
マジ ファイター
だっ たらなおさら無理だ」

マノサクスはベリルをマジマジと眺める。

「ベリル様ならいけますよね。勇者なんだし」

さらにレキナがベリルを見上げて言った。『勇者』というく
りで“いけますよ”という言葉のたまったようには思われない。

「行けばなんとかなるだろ」

ベリルはベリルで後頭部をぽりぽりとかきながら言い放つ。

「……勇者？」

レキナの言葉にマノサクスはそんな彼を怪訝な表情で見やった。「我々が呼び出したのは3人ですよ。リユート様とティリス様とベリル様」とベリルに手を向けて示す。

「！？」
ええええええええええ！」

集落にマノサクスの声が響き渡った。

「べりる。お菓子はやく」

子どもたちがベリルの手を取り催促する。

「お？ 少し待て」

笑顔で返し建物の1つに向かった。

「……」

マノサクスは目を丸くしたままその後ろ姿を見つめる。

「ベリル様は料理がお得意なんです」

「料理上手な勇者かよ……」

レキナの言葉に頭を抱えた。

彼はまだ知らない。ベリルの本当の『勇者』っぷりを――

「……」

目の前に置かれたロールケーキを見てベリルに目を移す。

「どうした、食べる」

バニラの香りが鼻を刺激する。

「糖分は疲労した体に良い」

酒を飲みながらマノサクスに食べるよう促した。

マノサクスは恐る恐るロールケーキにフォークを立てる。ぱくりと口に入れた瞬間、顔が思い切り崩れた。

「美味い……」

彼は甘いものが大好きだった。あつという間に皿の上は綺麗になり輝いた水色の瞳がベリルを見つめる。

「……」

ベリルが自分の皿をついと押すとすかさずガバツと食いつく。

「まだあるが食べるかね？」

マノサクスは子どものようにぶんぶん頭を縦に振った。

「持ってきます」

レキナが発し立ち上がる。

「……」

料理の上手い勇者……あrikaもしれない。マノサクスはベリルをじっと見つめた。

「明日、発てるか？」

「え？」

聞き返したマノサクスに酒の入ったコップを傾けてそれ越しにもう一度訊ねる。

「夕刻に発てるか」

「あ……」

訊かれて翼を動かし確認した。白にブラウンの斑点が映える翼は鷹を思わせる。

「多分、大丈夫だと思う」

その言葉にベリルは立ち上がり準備を始めた。

「何を作ってた？」

細い金属の棒のようなものをいくつも作っているベリルに問いかけた。

「工具」

完成した金属の棒を輪に通し音が鳴らないように工夫してその輪を腰につなぐ。1本1本の長さは10cmほどか。先端は様々な形に折れ曲がったり尖ったりしている。

それが終わると今度はハンドガンの手入れを始めた。

「？」

見た事も無い黒い物体にマノサクスは首をかしげてのぞき込んだ。
「魔法は使えるか？」

「え？ オレは戦士だから」

「ステムに頼むか」

ベリルは小さく溜息を漏らす。魔法を付与したカートリッジは大
半ボナパスで使ってしまった。

1弾倉分は付与したものを持っていたい。

「これに魔法を……ですか？」

ステムを呼び出し魔法の付与を頼む。

「出来るか？」

ステムは見慣れない金属の小さな塊を手に取り見つめた。

「やってみます」

「頼む」

付与してもらうのは炎と雷だ。

口の中で何かをつぶやくと手にしていたカートリッジは淡いオレンジの光を放って落ち着いた。

20発ほどそれが終わるとベリルは腰の剣を抜いて示す。

「これにも頼む」

「！ 剣にもですか？」

実はこの剣もティリスに魔法を付与してもらっていた。しかし、魔法の武器として製作されたものではないため固定は出来ず付与されていた魔法は消えかかっていた。

「冷気を」

「解りました」

「……」

手際よく準備していくベリルをマノサクスはあっけにとられて眺める。

「こう言っちゃ……あれですけど」

「！」

レキナは青年の隣に立ちぼそりとつぶやくように発した。

「ベリル様を残したこと失敗だと思います」

「へ……？」

そんなレキナの生ぬるい微笑みがマノサクスの心に強く印象に残った。

次の日の夕刻——ベリルはベルトをマノサクスに手渡す。

「？」

「体を固定するためのものだ」

抱きかかえて飛ぶのは疲れるだろうと彼は自分とマノサクスをつなぐベルトを作っていた。

「へえ……」

これならば両手も自由になり飛びやすい。作ったベリルに感心した。

「僕も一緒に行きたい処です」

「さすがにこいつだけで精一杯だよ」

レキナにベリルを指さしながら発する。

「その要石、修復出来なければどうなる？」

「……決まってるだろ。落ちるだけだ」

「そうか」

ベリルは目を据わらせてその顔をマノサクスに近づけた。

「だったら、落としてやろう」

「え……」

ぎくりとした青年からパツと離れる。

「そうすれば今後このような馬鹿な事はすまい」

「……冗談、だよな？」

「さあ……どうかな」

感情の见えない微笑みをマノサクスに返した。

「お気を付けて」

飛び上がるベリルたちに手を振るコルコル族の人々。

「……」

レキナは手を振りながら心の中で薄笑いを浮かべた。

ベリル様を残そうが一緒に捕まえていようが彼らにとっては災難にしかならないだろうな……と小さくなっていく影を見つめた。

しばらく飛んでいると大きな大陸がベリルの視界に入る。

「……でかいな」

予想以上の大きさだ。簡単に目測するとオーストラリアの3分の1ほどか……巨大な岩が大陸を何本も突き刺しているような風景。

木々や雑木林などが点在し人の住むであろう建物の集まりが3つ

ほど窺える。

「真ん中にあるのが俺たちの住むウエサシアだ」

まだかなりある距離から説明する。

天空大陸ウエサシスカの中心にそびえる城とその周りにある街。東西南北には高い塔とモノリスが1つずつあり、要石とその4つのモノリスが共鳴を起こし大陸を浮かせているのだ。

「あっちこっちに監視塔があるから気をつけて飛ばないと……」

マノサクスは警戒しながら大陸に近づく。監視の目をくぐり抜け大陸の上空へ……10mほどの高さまで近づくとベリルはつないでいたベルトを外した。

「わあっ!？」

マノサクスは驚いて声を上げた。華麗に降り立つベリルにフラフラと降りて近寄る。

「いきなり外すなよ。バランス崩して危ないだろー」

そんな文句も聞いているのかいないのか彼は周りを見渡す。降りた場所は中心都市ウエサシアの東南。

「リユートたちが捕らえられている場所は解るか」

「多分、地下牢だと思う」

地下牢はウエサシアの西にある。

四方に高い塔があり、その西塔に続く道の間から少し離れた場所に地下牢への入り口が設けられている。

中心に目を向けるとそびえ立つ優雅な城を思わせる巨大な建造物が視界に飛込んできた。

評議会が集まる建物で巨木がその建物を覆うように生えている。

ベリルたちが降りた場所は人があまり訪れることのない公園の外れ。ひっそりとした場所だった。

「……」

ベリルは上空から見た大陸を詳細に思い起こし記憶に留める。

* 四方八方誰が敵？

一方リユートのいる地下牢――

「……」

武器を全て奪われ、黒い鉄格子の中で静かに思考をめぐらせる。力を使えば逃げられるがその力を封じ込められている。鉄格子に刻まれた不思議な文様が彼の力を封じ込めていた。どういったものなのかは解らない。

「……ティリス」

つぶやいて宙を見つめた。俺の事よりも、あいつは大丈夫だろうか……目を細める。

不覚だった。せめてティリスだけでも逃がしてやれなかったのか……奥歯を噛みしめる。天空に浮かぶ大陸と聞いた。ベリルでも助けに来る事は出来ないだろう。

「フ……」

思って薄く笑う。

助けになど来る訳がないな……その翡翠色の隻眼を閉じる。

ベリルは薄いマントを羽織り西に向かう。

「なるべく普通にしていれば誰も気にしないと思うから」

多くの種族が行き交うウェサシスカにおいて、人間のベリルは関心に値する種族ではない。

「ようマノ。今日は人間がお供か？」

「あ、ああセノ。そうなんだ」

ぎこちない笑顔で知り合いと会話を交わす。

マノサクスがとりわけ長身な訳ではない。リヤシユカ族は平均身長が190cmなのだ。この大陸において人間という種族はリヤシユカ族よりも下に見られる。

「！」

ベリルがニコリと微笑むと、その端正な顔立ちに男は一瞬戸惑った。

「じゃあ俺、用事あるから後でな」

なるべく違和感が無いように普段通りに努めて発する。

「ん、ああ。またな」

遠ざかる後ろ姿に、ホッと胸をなで下ろした。

「心臓に悪いぜまったく……」

ベリルはそんな彼をほったらかしてスタスタと歩いていく。

「ちょ……おいつ」

しばらく行くと通路が豪華な造りになりその方向に目をやると、あの建物につながっていた。

評議会の集会場……一際、煌びやかで荘厳な建造物にベリルは目を細める。

そしてまた西に向かって歩き出した。通路の右側に林があり、その通路に沿ってかがり火が転々と設置され芝生が丁寧に刈られていた。

そうして、前方に見える少し雰囲気の異なる一帯がベリルの足を止める。

「ほら、あそこに見えるのが地下牢の入り口だよ」

マノサクスが指さす方向には、鉄の囲いの中に2人ほどの槍を手にしたリヤシユカ族の姿。

その間には2mほどの四角い形をしたものが置かれていた。よく見ると扉らしきものが見える。地下へと続く階段の扉だろうか？

「ふむ……夜に行動するか」

思案して2人は木の陰に隠れて様子を窺う事にした。

その頃コルコル族の集落――

「わっ！？　なんだ？」

突然レキナたちの目の前に数十人のローブを着た者たちが現れた。そして何かを探しているように集落を走り回る。

身長は160cmほどでフードを被っているため紫の瞳だけがギラついていた。魔導師たちだ。

「勇者はどこだ！」

「え？ ウェサシスカに連れていかれたよ」

「そうではない！ 残りの1人だ」

「え？ なんで？」

「……」

聞き返されて黙り込む。

「ハッ！？ まさか捕らえられた勇者を助けに！？」

それを聞いた他の魔導師たちはざわめき立つ。

「そんな！？」

「逆戻りかよ！」

「助けに行くか？ ふっ」

口々に言つて消えていった。

「……なんだったんだ？」

レキナたちはポカンとした。

太陽が暮れかけたウェサシスカ——ベリルは準備を始める。

相手は2人190cmの長身だ、いつものようには倒せそうになり。かがり火が灯されて辺りはよりいっそう暗闇に包まれていった。

「私が合図するまでここを動くな」

マノサクスに言つて警備の2人に背後から駆け寄る。

「ふああ」

だるい、いつもの警備に男2人は生あくびをして腕をかいだ。

「！」

視界の端に何かを捕らえたがすでに遅く腹部に蹴りを入れられる。

「ぐふっ！？」

「なに奴だっ？」

残った1人にベリルは何かを押しつけた。

「がはっ！？」

それは、バチバチバチ！ という激しい音を発し男は今までに無い痺れにけいれんして倒れ込んだ。

「……うは、すげえ」

鮮やかに警備を倒し眺めていたマノサクスに合図した。

倒した2人を側の林に連れ込み、猿ぐつわをして木に手足を縛る。ベリルはすっかり縛った事を確認して地下牢の入り口に向かった。

慎重に階段を下りていく2人……

「すぐ下にまた警備がいるよ」

マノサクスがひそひそ声で話した。

まあ当然か。とベリルは目で相づちを打ち、ゆつくりと足を進めていく。階段が終り壁から少し顔を横に向けると机に足を乗せて呑気に鼻歌を歌っている1人のリヤシユカ族が視界に入った。

すぐに顔を戻し一度、深く息を吐いて吸う。

意を決したように素早く警備に――

「！」

驚いた男は間抜けに転びながらも剣に手をかけた。

「がふっ！？」

しかしスタンガンの威力にまたもや痙攣して倒れ込んだ。

「それすげえな」。どんな魔法なんだ？」

「電撃かな」

クスツと笑ってスタンガンを仕舞う。

「後は見回りが2人ほどいるよ」

説明を聞きながらベリルはその警備も縛り上げた。目立たない場所に縛り上げた警備を置いてリユートを探す。

どうやらここは男性牢のようだ。駆けていくベリルたちを、いくつもの目が鉄格子の中から追う。

「！」

「あつ！ なんだお前たちは！？」

目の前に巡回中のリヤシユカ族が1人。ベリルは立ち止まる事なく足を速めた。

「え、おい？」

そんなベリルに驚いてマノサクスは立ち止まる。

剣を抜く……のかと思いきや、ベリルは鞘ごと目の前の男の足下に投げつけた。

「うわっ!？」

剣を抜いて駆け寄っていた男はそれに足を取られて転んでしまう。

「!……う」

「抵抗はするな」

体勢を立て直そうとした男の首元にナイフを突きつけた。

「うわ……やっぱすげえ」

そして縛り上げる。

あと1人、リユートを救い出すまでに会おうかどうかは解らないが確かにこれだけの動きなら1人でもここに乗り込む勇氣を持てる……とマノサクスは感心した。

「なあ……」

「なんだ」

リユートを探しながら歩くベリルに問いかけた。

「さっきの奴に訊けば良かったんじゃないの？」

その質問に少し眉をひそめた。

「どうして相手にこちらの情報を伝えねばならん」

「え？」

「我々が誰を助け出そうとしているのかを相手にわざわざ教える必要があるのか？」

「……そういうこと。でも探してる間に見つかったら……」

「その時の対処は考えている」

「そ、そう……」

ベリルは周りを探りながら進んでいく。まるで何かに誘われるようにその歩みは迷いながらも確かに目的があるように動いていた。

「……」

迷うと少し立ち止まる。そしてまた歩き出す……己の勘をフル稼

働させてリユートを探した。

「……」

鉄格子の入り口から遠い角にリユートは座り込んで片膝を立て腕を乗せて宙を見つめていた。

何を考えているのか何も考えられないのか……

「テイリスの事でも考えていたか？」

「！」

聞き覚えのある声に鉄格子の方に目を向ける。

「……ベリル？」

薄笑いを浮かべている男に目を丸くした。

「どうせ助けに来ないとも思ってたか？」

言いながらしゃがみ込む。

「べ、別に……っ」

プイと顔をそむけた青年にクスツと笑う。そしてあの金属の束を手にした。

「あ！ それそういう道具だったの」

「何をしてるんだ？」

入り口に近づいてベリルの手元をのぞき込んだ。

「お、意外と簡単な造りだな」

2、3本ほど鍵穴に差し込んで手にしている1本を少しずつ微妙に動かす。

カチリ……という音と共に金属の棒を全て抜いて立ち上がり扉に手をかけると小さな扉は金属のきしんだ音を立てて開いていった。

「……」

「どうした、出ないのか」

怪訝な表情を浮かべながらリユートは鉄格子をくぐる。

「さて、女性牢はどこだ」

「女の人は西の塔に入れられるんだ」

「むっ！？ なんだお前らっ」

残りの1人がベリルたちを見つけて剣を抜く。その動作と同時にリユートは身構えベリルは素早く駆け寄った。

「えー!? ちょ……まっ……!?!」

剣も抜かずに向かってくるベリルにリヤシユカ族の男は頭が混乱する。

「く、くそ!」

気を取り直し目の前まで迫ったベリルに剣を振り下ろした——だが、その振り下ろされた剣は甲高い金属音と鈍い腕の痛みに変えられる。

* 救出

左手に見えたのは逆手に持ったナイフ――それで相手の攻撃を防いだのだ。

「そっ！？ そんなダガーで？」

「特殊合金製」

言ってにこりと笑う。

そしてお約束のようにスタンガンが炸裂し同じように縛り上げて今度はその牢に放り込む。

そしてマジマジと柵を観察した。

「！」

リユートがいた牢にだけ不思議な文様の描かれた丸い物が取り付けられている。

「ふむ……」

なるほど、これがリユートの力を封じていた訳か。造りも思っていたより頑丈なようだ。鍵穴にいたってはそこまで凝る必要も無いという判断だろう。

確かに道具が無いと解錠するのは困難だ。ベリルにとってこのテの鍵は難易度の低い部類に入る。

「……」

リユートはマノサクスを睨み付けた。

「う……ごめんよ。でも俺は評議会の決定に疑問を持ったから知らせに行ったんだぞ」

「ちよいと手遅れだったがね」

「ぐっ……」

ベリルの言葉に声を詰まらせる。

* 恐れとシャンデリア

「彼の助けでここまで来たのだ、それで許してやれ」

小さく笑いリュートの肩をポンと叩いた。

そして、ここに囚われた者たちの荷物が置いてある倉庫に向かいリュートは自分の持ち物を装備していく。

暗がりの中、西の塔に向かう3人——かがり火があちらこちらの芝生を照らしている。しばらく歩くと西の塔の入り口が小さく視界に入った。

「！」

ベリルが左腕をすつと横に出し2人を制止すると塔の入り口からたいまつを持った数人が出て来るのが見える。

その3人目に両手をつながれたティリスの姿が……リュートが剣の柄を握りしめ駆け出そうとした。

「！？」

「すぐに何かされる訳ではない」

肩を掴んで制止したベリルを険しい目で睨み付けるリュートにティリスたちの列をあごで示して発した。それに青年は小さく舌打ちを返す。

マノサクスがいる事で誰も疑問に思わないため、再びマントを羽織っているベリルとリュートたちに誰もいぶかしがる者はおらず遠くからの尾行は今の処、成功している。

「！」

ティリスが飲み込まれていく建物にリュートは少し驚いた。今までにない巨大な城が目の前にそびえる。

「評議会の集まる場所らしい」

「要石もここに^{かなめいし}あるよ」

「要石？」

聞き返したリユートに説明するマノサクス。すると眉間に刻まれていた縦じわがさらに深くなった。

「俺たちをその修復に使おうとしたのか」

その魔導師とかいう奴ら、叩き斬ってやる。

「ほらほら、見失うぞ」

ベリルがしれつとした顔で2人をちよいちよいと呼び寄せるように手を動かした。

城の中は想像以上に豪華で広い……エントランスには多くの人々が行き交い、高い天井には煌びやかなシャンデリアがいくつも吊るされている。バロック様式に似た見事な造りだ。

両端にある階段の左側から上の階へ——広い廊下を進むと分厚い扉があった。巨木の1枚板で造られた大きな両開きの扉には、繊細な彫刻が施されあちこちに金箔が貼られている。

取っ手を持って引くと意外とすんなり開いた。

「！」

ベリルは少し眉をひそめリユートも同時にしかめ面になる。薄暗いその空間に何かしらの脈動を感じたからだ。

目の前にある階段を上る。しばらくするとそれは二手に分かれ、右の階段をさらに進むとぼんやりと青い光が見えてきた。

「……でかいな」

ベリルが目を細める。視界に飛込んできたのは淡い光を発して脈打っている巨大な浮かぶ岩。

「これが……」

「要石だよ」

雲の形をした10mはあろうかという巨石。よく見ると斜めに小さな亀裂が走っていた。

それを確認して上に進むと、反対側の階段には要石に近づく事の出来る出っ張りがある事が見て取れた。

要石の部屋を抜けるとまたも豪華な造りが目を刺激する。

真っ直ぐに伸びた通路の先に大きな部屋がある事が確認出来た。

その部屋は細めの通路にぐるりと囲まれていて1辺に扉が等間隔に3つ付いている。

真ん中の扉ではなく右側の扉を静かに開き置いてある棚や花瓶台に隠れるようにしながら近づいていった。

豪華な椅子に腰掛けている老齡のリヤシユカ族。その人物をモノサクスは指さす。

「あの方が評議長レイノムス様」

50代ほどの立派なブラウンの翼をたたみ威厳のある面持ちでレイリスを見据えていた。

その両隣には剣を腰にたずさえ槍を持ったリヤシユカ族が2人。そして武装した有翼人が彼女を取り囲んでいる。

その中にはコルコル族の集落で目にした青年、濃いグレーの髪と赤い瞳のセルナクスもいた。レイリスは拘束を解かれた両手を胸の前で組み、戸惑いながら口を開く。

「あ、あの……」

「我らにはあなたの力が必要なのだ」

言い切る前にレイノムスが応えた。白髪交じりの銀の髪を後ろで束ね、慇懃^{いんぎん}な態度で語りかける。

「あたしの力？」

少女は意味が解らず小さく首をかしげた。

息を潜めて聞いていたリユートがぴくりと反応する。

「さよう。あなたと、もうひとかたの力が無ければこの大陸は地に落ちてしまうのです。どうか協力願いたい」

「……」

目を細めて拳を強く握る青年の様子をベリルは静かに見つめた。

「よく解らないけど、困っているんですね」

「ええ……異世界から来たあなた方の力が最後の希望なのです」

レイノムスは深い溜息を吐き出して頭を抱える。

「でも、どうしてこんな事を……」

彼らのやり方をレイリスは疑問に思っただけで問いかけた。

ベリルは立ち上がっていたマノサクスの腕を強く引いてしゃがませた。その途端、地響きが低く起こり風が部屋を駆けめぐる。

「な、なんだこれ？」

「魔族化したか」

「く……」

強い風を防ぎながらリユートを視界に捉えるセルナクスの目に映った姿は――

「な……っ!？」

閉じられていた右目が開き金色の瞳が輝いていた。

「こ、これはその者が起こしているのか……?」

レイノムスは肘掛けを握りしめて天井を見上げる。

「リユート!」

ティリスの声は風の音にかき消された。魔族化による力の暴走で近づく事も出来ない。

「化け物だ……」

言った兵士をぎろりと睨み付ける。

「このままじゃ城が壊れるよ!」

マノサクスが床に手を突いて体を支えながら発した。

「……」

ベリルは立ち上がりショルダーホルスターからハンドガンを静かに抜き取る。

「!」

甲高い音が広い空間に響き、そちらに一斉にみんなが目を向ける。

ベリルが天井に向かって1発、発砲したのだ。

「冷静になれ」

「……」

“ガッシャアアーン!”

ベリルの真横にシャンデリアが落ちてきた。

「あ……当たってたか」

大破したシャンデリアを見てベリルがしれっと応える。

それに一気に脱力したリユートが右目を閉じて魔族化を解くと、風により舞っていた紙や小さなアイテムがバラバラと床に落ちていった。

「行け」

「！」

彼の瞳に、リユートはティリスの腕を掴んで走り出した。

「！？ 待てっ……。！」

追いかけてようとした兵士たちの前にベリルが立ちはだかる。その顔には満面の笑み。

持っていたハンドガンの銃口を上に向けて3発ほど発砲しすぐに扉に向かって駆け出した。マノサクスもそれに続く。

「待っ……」

「うわあっ！？」

「ひゃあっ！」

上から巨大なシャンデリアが落ちてきて部屋を照らしていたメインの灯りが無くなった事で薄暗くなる。

「早く追うんだ！」

セルナクスの命令に兵士たちは彼のあとに続いてリユートたちを追いかけた。通路に出るとセルナクスはその翼を広げ要石の部屋へと続く扉に手をかけているベリルに凄い速度で迫っていく。

そうして扉の取っ手に手をかけているベリルを睨み付けた。

「意外と速いじゃないか」

まるで緊張感のない彼の声にセルナクスは眉間にしわを寄せた。

「リユ、リユート！」

ティリスが後ろからついてこないベリルを心配しリユートに呼びかける。その目に青く輝く要石が映り、少女は魅入られたように近寄った。

「綺麗……」

「奴が足止めしている間に行くぞ」

再びリユートが促したが、ティリスは大きく頭を横に振った。

「だめだよ！ 仲間だもん」

「！」

厄介な頑固さだが、これがティリスなんだな……強い眼差しに小さく溜息を吐き出す。

2人は共に頷いて階段を駆け上がった。扉を勢いよく開く――

「！」

視界に映し出されたのは剣を持つベリルの姿。次に、剣を構え対峙しているセルナクスの姿だった。

「どうした、さっきの武器は使わないのか？」

「相手くらいはしてやる」

余裕の言葉にセルナクスは力チンと来た。

「チビが！」

勢いよく剣を振り下ろした。この勢いでは剣で防いだとしてもそのまま振り抜かれてしまう。しかし――

「！」

剣は振り抜かれる事なくベリルの剣に受け止められた。

「……なるほど」

それを見たりユートが感心した。

* 黒と白の境界線

逆手に持った剣の後ろにあるのはその剣を持った腕——ベリルは剣で受け止めたというよりも腕で受け止めたのだ。

「……っ知恵だけはあるようだな」

「その翼……」

エメラルドの瞳を細めて口角を吊り上げた。

「その翼、傷つけたくはなからう」

「！？ なんだと？」

ゾクリとして思わず飛び退く。

チビな分だけ動きは速い。今の防ぎ方でも解る……こいつは危険だ。

「……だめだな」

「え？」

リユートは2人の闘いにぼそりとつぶやいた。

「な、何やってんだよセルナクス……」

マノサクスは彼の動きに苛ついていた。ベリルの言葉で無意識に翼を庇っている……そのために動きがきこえない。

この2人は共に評議会の護衛を務める兵士だ。子どもの頃からの馴染みでお互いに剣を交えその強さを競い合い、こんな事になるまではとても仲が良かった。

そんな彼がセルナクスを応援するのは当然といえば当然ではある。

「ベリルの動きに追いついていない」

あの独特の動きは、俺でも対応出来るかどうかあやしいもんだが

……リユートは薄く笑った。

「このっ……！」

セルナクスが力任せに振り下ろした剣を受け止めそのまま流す。

「！」

ガクンとバランスを崩し彼に背中を向けて剣の腹でセルナクスの

手首を思い切り叩いた。

「!?!? ……っ」

剣は大きな音を立てて床に転がる。ベリルはすかさずナイフを抜き見えるようにその切っ先を腹部に突きつけた。

「まだやるか」

「……いいや」

見上げるベリルの瞳に負けを認めた。

「お前、本当に人間か？」

「勇者だよ」

マノサクスはセルナクスの剣を拾い上げ、彼に手渡しながら発した。

「は……？」

「だから、勇者なんだって」

「なに？」

実は3人召喚したんだってさ……というその言葉に目を丸くする。

「あの……」

ひとまず落ち着いた空気にティリスは戸惑いつつ口を開いた。

「さっき言ってた、大陸が落ちるって……」

「……」

セルナクスは剣を収め少女に苦い顔で応えた。

「この大陸は要石によってこの位置に保たれている。その要石にヒビが入ってしまった……修復しなければこの大陸は大地に落下してしまう」

「それで、俺たちの命が必要だって事だろう？」

「えっ!?!?」

リユートの怒りを帯びた声に驚いてセルナクスを見やる。

「……」

その視線に目を泳がせるセルナクスがゆっくりと要石のある部屋に足を踏み入れると、淡い光が部屋を満たしていた。

ごつごつとした岩肌だがその輝きは温かい。

「ウェサシス力はずっと世界を支えてきた英知溢れる大陸だ。上空にあるからこそ、1つに囚われず広い視野を確立してきたと言ってもいい」

目を細め要石を見つめた。

「俺は、自分に誇りを持つてる。この大陸と評議会を守る使命を…

…！」

「例えば人の命を犠牲にしても。か？」

「……」

ベリルの言葉に目を伏せる。

「お前の気持ちも解らなくはない」

言いながら要石に目を向けた。

「だが同時にマノサクスの行動も正しい」

「！」

隣の友に目を向けるとマノサクスは苦笑いを浮かべていた。

「1つ聞くが……」

ベリルは少し顔を後ろに向け静かに問いかける。

「強い勇者の力が必要だと魔導師が言ったのか」

「そうだ。彼らは予言を聞く事が出来る。我々と共に大陸を支えてきた者たちだ」とセルナクス。

「……」

要石に足を進めすつと手を伸ばした。

「！ 触れたら痺れるよ」

マノサクスは注意を促したが何故かそうはならなかった。吸い込まれるようにペタリと手を添えエメラルドの瞳を細める。

すると――要石の光が増して脈動が強くなった。

「な！？ なんだ？」

「何が起こったんだ！？」

皆が口々に発して部屋を見回す中、セルナクスはベリルの背中を見つめて語気を荒げた。

「どういう事なんだ……っ」

「もしかして……力の強い者じゃなく」

心の強い者だったのかな……つぶやいたマノサクスを一瞥しセルナクスはベリルに視線を戻した。

「強き者……そうだったのか」

要石は彼の不死性を求めたのかもしれない……しばらくすると要石は満足したようにその輝きを安定させた。ヒビはいつの間にかすっかり消えて淡い輝きが再び部屋を満たす。

「……フウ」

手を離し溜息交じりに小さく笑った。

「ベリル……大丈夫か？」

マノサクスが心配そうに近寄る。

「大丈夫なものか。しばらく動けん」

それを聞いてティリスが身を乗り出した。

「あたしが回復しようか？」

「そうしてもらいたいのは山々なのだがね」

ベリルが苦笑いを返し続ける。

「中の組織が消失している。そういう問題でもなさそうだ」

「え……？」

「骨格は残っているが無理に動くと倒れてしまう」

吸収されるエネルギーにベリル自身の体を維持させるため内部の組織をエネルギー化したせいだ。

これがベリル本人の意思で出来る訳ではない処が彼にとっては少々、厄介な場合がある。

「すまないが、腰に下げている袋から空薬莢からやつぎょうを取ってくれないか」

「これ？」

マノサクスは袋の中をあさって指に触れた金属を1つ取り出した。

「口に入れてくれ」

「ええっ!？」

「手っ取り早いエネルギー摂取だ。美味くはないがこれが最も効率が良い」

「これじゃなきゃだめなのか？」

さすがに金属を人の口に入れる事に躊躇する。

「いいから早くしろ」

「……やっぱ食べ物とかにしない？」

リユートがまごついてるマノサクスから空薬莢を奪い気味に取りベリルの口に入れた。

「！」

しかし内部組織が構築される前にバランスを崩しグラつくとともにセルナクスが受け止めた。

「……すまんね」

「いや、俺たちの方こそ……」

「お前……知らないだろうけど」

その光景に何故かマノサクスは気に入らなくて目を据わらせて発する。

「ベリルは不死だぞ」

「……不死？」

聞いた言葉に驚いてベリルを見下ろすと、とぼけた顔でセルナクスを見上げニヤリと口の端をつり上げた。

そして、改めて3人は評議長の元に促される。

「すまない事をした……まさかこちらのミスとは」

詳細を聞いたレイノムスは腰掛けながらも深々と頭を下げた。

「それが正しくても実行したんだろう」

怒り冷めやらぬようでリユートがレイノムスをぎろり睨み付ける。そこにいた兵士たちはそれに強ばった反応を少し示した。

レイノムスはばつの悪そうに苦笑いを返しベリルに目を移す。

「ベリル殿、貴殿のおかげで大陸は救われた。本当になんと礼を言っているのか……」

彼は小さく笑って軽く手を挙げた。それから、謝罪も兼ねて晩餐に参加して欲しいと求められすでに夜も更けているため3人はそれ

を受ける事にした。

城の別のフロアに案内され席に座る。

運ばれてくる香ばしい匂いと丁寧に盛りつけられた料理にティリスは笑顔になった。色々あってお腹が空いている。

「さあ遠慮無く」

レイノムスがにこやかに促した。

「いただきます！」

少女は元気にナイフとフォークを手にし目の前の料理に上品に突き立てる。大きな丸テーブルには貢献したマノサクスも席に着いていた。

「……」

ものすげー上品だなおい。綺麗な顔を見れば納得も出来るけど……とベリルの隣でその食べ方に目を丸くする。

ティリスとリユートも改めて彼の食べ方に感嘆した。

「！……？」

一同に見つめられて怪訝な表情を浮かべる。戦場ではマナーなど言ってもらえないが、こういう席での彼は幼少の頃に教わった食べ方を自然としてしまう。すでに体に染みついた“クセ”という事だろう。

食事を終えティータイムに入る。ベリルたちはレイノムスと語りそれなりにうち解ける事が出来た。

それぞれの世界の事の質問に各々が答える。だがベリルは武器についての質問には答えなかった。

道具の1つでありそれは使う者次第だが……余計な知識は必要無い。

この世界において自分の持つ武器は早すぎる。己の世界でさえも使い余している場合もあるというのに……全てが善し悪しで境界線を引ける訳ではない。

ほとんどの場合はその境界線上をふらふらと移動を繰り返しながら不安定に存在している。

評議会の決定もマノサクスの行動もその1つ……どちらが正義とも悪とも言えない。だから人に犠牲を強いた事に怒りを感じても、それを責める心はベリルにはなかった。リユートやティリスも同じ感情なのだろう。

レイノムスはベリルの武器に興味を示したが彼はそれをのらりくらりとかわし続けた。ティータイムも終えて部屋に案内される。

リユートとベリルは同室、ティリスはもちろん別室だ。

*寝る前のひととき

ベリルは装備を外して伸びをし肩と首を疲れたように回す。

「あゝ疲れた」

ベッドに体を投げて向かいのベッドに腰掛けているリュートに目を移した。

「彼女なら心配ないよ」

青年の瞳に小さく笑う。

「！」

見透かされたように声をかけられて視線を逸らした。

「もうすぐだろっ」

「？」

ベリルがパチンと指を鳴らした。

するとドアがノックされ、ぴよこつと顔を出したのは……

「！ テイリス」

「あの……」

少女はおずおずと部屋に入ってくる。

「外の空気を吸ってくる。ごゆるりと」

薄笑いで立ち上がり、冗談交じりにドアの前で右腕を胸の前で折り深々とおじぎをして出て行った。

*つながる結論

ベリルを見送ったあとティリスは青年の側に歩み寄る。

「リユート……大丈夫だった？」

「！」

魔族化したリユートを気遣ったの言葉……リユートには精神的にも肉体的にも『魔族』というものが重くのしかかっている。

だが……彼はベリルという人間によって己の意識がぐらつき始めていた。

『魔族』というだけで虐げられてきた自分が誰かを愛するなど許されるのだろうか……いや違う、俺と共にいる事でティリスを自分の運命に巻き込んでしまう事を恐れている。

リユートは半魔族であるが故に全てを割り切り、数々を諦めてきた。そうして生きてきた。しかし今……ベリルの存在が何かを不安にさせ、何かの希望を感じさせる。

掴めない感覚に戸惑いが生まれていた。

「ああ……大丈夫だ」

小さく笑って優しく応える。ティリスはそれに安心し彼の横に腰掛けると、そつと肩に頭を預けた。

「……」

それに胸が高鳴るのを覚えた。彼女にバレてはいないだろうか……

……そう思うとさらに鼓動が速くなる。

ティリスが無事なら俺はどうなろうと構わない。

心に秘めた想い——それはまだ打ち明けられない。『半魔族』という事、そして今まで受けてきた傷が彼を頑なにしていた。

彼らの世界、地上界ウォルシードでは青は慈愛の女神の象徴。故に空色の髪の乙女は女神の加護を受けた者と云われている。

ティリスのように空色の髪を持つ者は決して多くはない。

リユートにとって、ティリスは本当の女神だ。己の命すら投げ打

つてでも守りたい存在…… おてんばで時折、困った行動をするじゃ
じゃ馬女神。そんな前では自分が『魔族』である事など、どうでも
よかった。

それなら素直に想いを告げればいいのに…… という事は別の話で
もある。

若い！ 若いなと、ベリルは口の端をつり上げて星空を眺めて
いた。

己には決して生まれない感情。それを側で見ているベリルは目を
細めると同時に楽しんでしまった。

性格がかなり悪い彼だがそんな2人が羨ましくもある。

恋愛感情の欠如は生まれながらのものだ。しかしその感情が理解
出来ない訳ではない。人という存在を愛しく思えばこそ、彼は戦い
でしか救えない命のために『傭兵』という仕事を選んだのだから……

どれほど死力を尽くそうと目の前で消えていく命を止められない
事もある。己の力など小さなもの、救える命などごくわずかだ。そ
れでも救える命がある。

彼もまたリユートと同様に己の存在を良しとはしていない。だが
彼は己の全てを『道具』として見ていた。

道具は使う者次第——それは全てにおいて云える事だ。ベリルは
己さえも、そう認識した。

そんな意識、普通の人間に持てと言ってもどだい無理な話だ。

『彼ならばこそ、全てはつながった』

人工生命体も…… 不死も…… そう考える他はない。がそれを考え
た場合、魂が先なのか肉体が先なのか……？

神という存在が確たるものならば、そのような議論も成り立つの
かもしれないが、最終的には『ベリルだから』だ。それ以外の言葉
など、誰にも見つけれなかった。もつとも、そんな事はベリルに
とってどうでもいい事なのだが。

新月の空は、まばゆいばかりに星々を映し出す。見慣れない星空

だが、やはり美しい。

「ベリル」

「！」

背後からの声、セルナクスだ。

「眠れないのか？」

「星を見に来た」

そんなベリルを見下ろす。

「明日……帰るのか？」

「ん？ うむ」

セルナクスは残念そうに溜息を漏らした。

「そうか…… お前と剣の訓練をしたかったんだが」

「そんな長居はしてられんよ」

召喚された理由は解決した。元の世界に還らなければ。しかし、まだ1つひっかかっている事がある。

『ボナパス』の存在だ。

人造物であると推測しているが確証がある訳ではない。知らない世界なのだ、ああいう生物がいたとしてもおかしくはないだろう。

「……」

そう思いながら眉をひそめる。

やはり、彼らを還らせて自分は残り探索した方がいいだろうか？
納得出来るまで付き合いたい。それが彼の正直な感情だ。

「セルナクス」

「！ なんだ？」

セルナクスを一瞥して続ける。

「この世界に生物を造り出す事に長けた者が種族は存在するか？」
問いかけに小さく首をかしげた。

「？ 昔ならいたかもしれないが、今は禁止されている」

「そうか」

さすがにすぐに見つかるほど簡単な事ではないようだ……腕を組んで溜息を吐き出す。

「……」

セルナクスは無言になったベリルをじっと見下ろした。おもむろに……

「もつと近くで星を見たくはないか？」

「ん？」

ベリルの答えも聞かずにセルナクスは彼を抱きかかえた。

「！　おい……」

ベリルを横抱きに抱え翼をはばたかせる。その翼はマノサクスよりも少し大きかった。

ふわりと地面から足が離れ、空中に。大陸よりも高く、そびえる城の頂点よりもさらに上空へ――

「……」

眉をひそめていたベリルだったが目前に広がる大地と星々に表情をゆるめる。そんな彼の瞳をじっと見つめた。

「……なあベリル」

「なんだ」

「この世界で暮らさないか？」

「何を言っている」

当惑したように発して一笑に付した。

セルナクスはそれに苦笑いを返す。本気だったんだけどな……声に出さずに留める。

そうして、夜の散歩を楽しんだあとそれぞれは眠りに就いた。

翌朝、ベリルたちはコルコル族の集落に戻るため自分たちを送り届けるリヤシユカ族の人たちと大陸のへりに立つ。

ここまでは別のリヤシユカ族の人間に運んで貰った。何せ大きな大陸、端まで歩いていては時間がかかる。

「オレが運ぶ！」

「俺だ！」

「……」

マノサクスとセルナクスの言い争いをベリルは静かに見つめていた。2人はどちらがベリルを運ぶかで言い争っているのである。

「人気者じゃないか」

リユートが皮肉混じりに発した。

「勘弁してくれ……」

彼の表情にリユートはにやりとする。ようやく初めて勝った気がした。

「勝負だ！」

「受けて立つ！」

緊張が走った処でジャンケンの開始。ベリルはバカバカしくて手で顔を覆う。

「おーっし！ 勝った」

「くっ……セルナクスめ」

こうして見ると彼らは普通の青年だ。動機は清純なのか不純なのか定かではないが……

「付けないのか」

「いらん」

お互いをつなげるベルトの装着をセルナクスは拒否した。

「お前1人くらい抱きかかえて飛べる」

確かに今回は忍び込む訳でも危険がある訳でもないが……

「俺が手を離す事なんてあるものか」

自信満々で応える。

「！」

ベリルの前にリユートの手が差し出された。

「……」

無言で見つめられてベルトを渡すとそれをテイリスに手渡した。

地味にテイリスを運ぶリヤシユカ族にヤキモチ焼いてんじゃないぞ……と呆れてリユートを一瞥する。確かに、このベルトをつければ体に接する事は無い。

翼があるため背中に背負う事が出来ない以上、横抱きか腕の下に

手を通して抱きかかえるしか無いのだ。

「待て……何故この持ち方なのだ」

「これが一番安定する」

セルナクスは前夜と同じように横抱きに抱えた。

「安定を考えるならベルトを……」

「さあて行くぞー」

ベリルの言葉をさえぎってテンション高めに上空へ——リユートを運ぶのはマノサクスだ。一応、落とさないようにベルトを巻き付けている。

この季節はコルコル族の上空を移動するルートなので、来た時よりも少し集落に近づいている。

「わあ！ 凄い……」

壮大な景色に笑顔を見せる少女のその表情にリユートの顔もほころぶ。太陽に映える草木と照り返す湖は目に浸みるほどだ。

「……キレイ」

少女の素直な言葉に一同は微笑んだ。

「どうしてそう密着したがるのだ!？」

「暴れるなよ！ 落とすだろっ」

声を荒げるベリルをセルナクスが無理矢理制する。

* 希求・ききゆう *

「くそ……セルナクスめ」

頭上から悔しそうなマノサクスの声。

「……」

まさかこの2人……いや、そんな訳あるハズが……リユートは自分の考えにぞわりとした。しかし聞いてみたくもなかった。

「あいつのどこがいいんだ……？」

「え？ 綺麗じゃん。強いし」

そこ！？ いや、普通に返した！？ どっちに突っ込んでいいものやら……リユートは当惑した。

快適な空の旅も終わりに近づく。コルコル族の集落が眼下に見えてきた。

「！ 帰ってきた」

広い間隔で生えている木々はコルコル族にもリユートたちの帰還を視界に捉えさせる。

「良かった……」

レキナとSTEMは安堵の表情を浮かべた。

「みんなー！」

ティリスは手を振るレキナたちに同じように手を振って応える。

残り高さ数メートルという処でリユートとティリスはベルトを外し飛び降りた。

「レキナ！」

「おかえりなさいませ」

少女はレキナに駆け寄り抱きしめる。見た目フェネックに抱きついていいるとしか見えないため青年の顔が優しげだ。

「いい加減に離さんか！」

声の方を向くと横抱きされていたハズのベリルがいつの間にか普

通に抱きしめられていた。

「……」

災難だなベリル……呆れたように頭を横に振る。

心の中で笑いたいが、自分にも経験があるので他人事のようにには思えない。あれほど鳥肌が立った事はなかった……と思い出して身震いする。

「ベリル様！」

駆け寄って笑顔を見せるレキナにベリルも笑顔で返す。無事で帰ってきた事の安堵と少しの寂しさがレキナの表情を曇らせる。彼らとの別れが迫っていると感じたからだ。

「……あのやろう。まだベリルに触ってやがる」

怒り心頭でつぶやくマノサクス。

「お前ら、そういう趣味なのか？」

さすがのリユートも口に出さずにはいらなかった。

「んな訳ねえだろ」

じゃあベリルだけにはそういう感情を抱いたのか……2人で？

彼の存在は性別までも超越してしまうのか？ 頭が混乱して険しい顔で唸る。

「いい加減にせんかあ！」

セルナクスを引きはがし気を取り直した。

「お前、触りすぎだ！」

「知るか！」

後ろでマノサクスとセルナクスが何か言い合っているようだが無視だ。

「……？」

しかしふと思い出す。

「マノサクス」

「何？」

「マナについてなのだが」

「ん……」

3人のリヤシュカ族が辺りを見回す。

「これは……？」

マノサクスは怪訝な表情を浮かべた。

「変だ……要石は修復されたのに、マナが乱れている」

セルナクスはそれを説明するように当惑した様子で口を開く。

「戻って確かめてきてくれ」

仲間の1人にウエサシス力の様子を見るようセルナクスは指示した。

「大きな変動じゃないけど何かがマナのバランスを崩してる」

「……」

ベリルはそれを聞いて目を細めた。

召還の失敗が意図的なものだったとすれば……

「！？」

肌が、ざわりと何かを告げた。

「警戒しろ！」

「！？」

ベリルの声にリユートはとっさにティリスを抱き寄せる。

リユートたちの耳に何かが迫り来る音、それは大きな生き物が4本の足で激しく駆けている音だ。

そして現れたのは――

「！？」

「……ボナパス」

「改良型のようだな」

おののくレキナの肩を抑えベリルはその姿に口の端をつり上げた。倒したボナパスとはかなり姿が違っていた。やはり人造物だったのだ……真っ赤な体と2つの頭はそのままに、大きさはふた回りほど小型化している。

「な……なに、こいつ？」

「見た事もないモンスターだ」

マノサクスとセルナクスは初めてみるモンスターに体をこわばら

せた。

「……」

以前とは違う……ベリルはその頭の動きに目を見張った。

牙はさらに長く爪は鋭く筋肉は強靱に——真つ赤な胴体とたてがみ、尾は爬虫類のそれを思わせる。その頭には2本の角が生え帯電していた。

見るからに以前のボナパスよりも厄介だと窺えた。以前のボナパスのままであつたなら、どちらが『砲台』であるかを今なら見極める事が出来たのだが……苦い顔になる。

「ム？」

ボナパスの双頭が大きく口を開いた。炎を吐く気か！？ベリルが手で指示を出した。

不気味に開いた口から赤い炎が吹き出す。その瞬間ベリルはボナパスの目的を察した。そう——奴の炎はベリルから全てを遠ざけた。

「！？」

気付いた時にはボナパスはすでにベリルの目の前に来ていた。

なんとという素早さ……感心する間もなくボナパスはベリルの腹部に勢いよく噛みついた。

「！　がああッ」

「ベリル！？」

「きゃああ！？」

「なっ！？」

皆が驚いている間にボナパスは彼を啜えたまま走り去る。

「ハッ！？」

セルナクスは慌てて翼を広げボナパスを追った。

「レキナ！　カルクカンは！？」

リユートが声を張り上げる。

2人はカルクカンに飛び乗りセルナクスたちの姿を上空に捉えあとを追う。

「ぐ……っ」

どこに連れていこうというのだ……ベリルは食い込む牙の痛みを必死にこらえシオルダーホルスターからハンドガンを抜いた。

それをボナパスの右目に――！

「ギャオオオ！？」

激しい痛みにはベリルを投げ捨てる。その勢いで草の上に滑り込むように7mほど飛ばされた。

「ベリル！」

一足早く追いついたセルナクスが飛び降りる。

「がはっ」

大量の血を吐いたベリルに真っ青になり、急いで肩に手を添えたがそれを払った。

「奴から目を離すな」

「しかしっ……」

セルナクスはベリルの腕を掴むとその腕は痛みで震えていた。それでも彼は揺るぎない眼差しを目の前のモンスターに向ける。

遅れてマノサクスとリユートたちが追いついた。飛び降りざまに剣を抜くリユート。

「ベリル！」

ティリスは声を張り上げながらカルクカンから飛び降り駆け寄った。

「！？」

その姿を見て両手で口を覆う。

着ている服が血で真っ赤に染まっていた。おびただしい量の血が流れた事が容易に想像できる。

「ティリス」

「！はいっ」

「奴の狙いは私だ。また捕らえに来るだろう。その時は――」
私ごと魔法で攻撃しろ。

「!? なっ……………」

ベリルの言葉に目を見開いた。

「ためらっている暇はない」

「……や」

ティリスは必死に言葉をつむぎ出す。

「いや……………」

「ティリス! ……………!」

征しようとしたベリルだったが、彼女の目から涙が止めどなくこぼれているのを見て言葉を詰まらせた。

「……………」

「いやよ。これ以上ベリルが苦しむのは見たくない」

「苦しみなど……………」

「うそっ! 痛みで気を失ったじゃない! もうやだよ」

大きな瞳から溢れる涙に苦笑いを返した。

「すまなかった」

言って頭をやさしくなでる。

「リユートたちが相手をしてくれたおかげでかなり回復した。別のプランで闘おう」

「うん!」

いちいちカートリッジを出していられない。ベリルは予備の弾倉^{マガジン}をティリスに差し出した。

「頼む」

「まかせて!」

魔法の乗った弾倉を受け取りそれをハンドガンに収める。セルナクスに目で示しボナパスの元へ――

「行つて!」

「え?」

ティリスはセルナクスを戦場へ促した。

* 開戦の時

「あたしなら大丈夫！」

「……よし」

少女の強い瞳にしっかりと頷き、セルナクスも剣を抜いてリユートたちの処へ駆け出す。

「！ ベリル」

合流したベリルにリユートが一瞥した。彼の指示を待つ。

「今回の敵は以前よりも厄介だ。味方が増えたのは頼もしい」

「あれは何なんだ？」

「初めて見るぞ」

遅れて合流したセルナクスも目の前のモンスターを凝視した。

「ボナパスだ。コルコル族が名付けた」

「俺たちは奴を倒すために召喚された」

2人の言葉に驚きを隠せない。

「今から奴の特徴を説明する。攻撃しながらの説明になる。聞き逃すな」

そう言つて右に移動するとリユートは左に移動した。やや後ろでマノサクスたちは全体を視界に捉えて聞く体勢に入る。

「風は有効だ。使い処を見逃すな」

「解っている」

「……」

ティリスは離れた場所から固唾を吞んで見守っていた。

* 炎の戦い

以前のボナパスよりもはるかに凶暴性を増している敵に、もはや己も闘いに加わるうとは思わない。

神官戦士として己がどうすべきなのかわっているからだ。

『戦場で癒しの力を発揮出来る者』

魔法と矢が飛び交う中にいて、なおも神官としての力を使えるのは戦いを知っている者だからこそなのだ。

彼女は今、戦場の女神として戦士たちの勝利を祈る。

マノサクスとセルナクスはベリルから事の経緯を聞き呆然と目の前のモンスターを見つめた。

「改良型？」

これで少しでも敵の注意が逸らせればいいのだが……とセルナクスが翼を広げて空へ舞い上がった。

「なんてこった……」

「……どうしたものか」

全てにおいて強力になったボナパスにどう対応すべきかベリルは迷っていた。小型化され動きが俊敏にはなっているが小さくなった分だけ『レモン』の効果は大きくなったはずだ。残る手榴弾は2つ——どうやって口の中にぶち込むか。

やはりボナパスの攻撃は他をベリルから遠ざけようとしている。

これだけ明確な動きをするという事は……

「誰かが命令をしたか、操っているか」

ベリルはつぶやいた。

以前のボナパスのような野放し状態とは違う。だが……奴の目的が明確ならばそれなりの作戦が立てられる。

自分が狙われている事はある意味、幸運ともいえた。今回はどちらの頭から潰してもこちらにメリットがある。

「足を重点的に攻撃。炎と爪に警戒しろ」
言ってみんなから遠ざかる。

ボナパスの視線はそんな彼に向けられ、その隙をついて右後ろ足をマノサクスが斬りつけた。

「！ ほう」

これは意外と早く倒せそうだ。その動きにベリルは感心しハンドガンを構えボナパスに引鉄ひきがねを引く。

「グオオオオ！」

その痛みによる怒りをボナパスはリユートに向けた。

「！」

「リユート！」

「……」

向かってくるボナパスを見据えて静かに剣を構える。

大きな爪がリユートに振りかざされた刹那——素早い動きで剣を振るった。

「ギャオン！」

その刃は先ほどマノサクスが攻撃した右後ろ足に刻まれる。

「うつ」

ボナパスの叫びと同時に発せられたその声の方に目を向けると方翼を焼かれたセルナクスが倒れていた。

リユートの攻撃と同時に、脇から攻撃しようとしたセルナクスにボナパスは炎を放っていたのだ。

「セルナクス！？」

親友の姿に驚いて駆け寄る。

「くっ来るな！」

集まれば奴の攻撃が集中してしまうとセルナクスはそれを制止した。

「ティリスの元へ」

ベリルの指示に痛みを抑えて少女の処へ向かう。

「！ セルナクス」

痛々しい姿に眉をひそめ、すぐに治癒を開始した。

淡い光が傷を包み込む。範囲が大きいため、動けるようになるにはしばらくの時間を要するようだ。

「なんなんだよこいつ……許せねえ」

親友を傷つけられふつと怒りがこみ上げてきた。

翼はリヤシュカ族の命だ。翼を無くせばどれほどのショックが心を貫く事か……奥歯をガリリと噛みしめる。

「1つ提案がある」

「！」

「……言ってみろ」

「左右から奴を攻撃してくれ。なるべく真横から同時に」

「！同時に？」とマノサクス。

「同時でなければならん。ズレればやり直しだ。何度もやると勘づかれるぞ」

リユートとマノサクスは互いに頷き剣を構えた。

ボナパスの注意は常にベリルに向いている。一瞬でも奴の気を自分から逸らす事が出来れば……

「……」

マノサクスはボナパスをぎろりと睨み付け翼を大きく広げた。

「！？」

ボナパスの視線がマノサクスに引きつけられる。次にリユートが剣を鞘に収めて居合い切りの構えで一氣に間合いを詰めた。

同時にマノサクスが翼を羽ばたかせボナパスに突進する。左右ほぼ真横からの攻撃に双頭の頭は互いに後ろを向く形となった。

「……！？」

炎を吐こうとしたその目に映し出されたのは――正面に口の端をつり上げたベリルの姿。

両手に持っていた手榴弾のピンの輪を指にかけ同時に外した。それを炎がちらつくボナパスの口の中へ……リユートとベリルが素早く身を低くして離れるのを見てマノサクスも慌てて離れる。

「ギャフ!?」

大きな爆発音と共に2つの頭が吹き飛んだ。血を吹き出してボナパスの胴体はゆっくりとへたりこむ。

「ひえ……」

マノサクスが感歎の声をあげてボナパスの死体に近寄る。

「動くな!」

背後からの声に振り返ると黒いローブを羽織った十数人の160cmほどの人々がテイリスたちを囲んでいた。

「テイリス!」

「動くなと言っているんだ!」

フードを被った性別の解らない人物がリユートに声を上げベリルが彼を制止する。

「魔導師たちだ。なんでこんなところに」

マノサクスは目を丸くした。

「おいっその勇者。こっちに来い」

1人の魔導師がベリルを指さして命令する。

「?」

ベリルはキョトンとして、自分を親指で指して確認した。

「そうだ、お前だ。武器は全部捨てろ」

「! ああ……」

それに思いついたような声をあげ、ニヤリと口角を上げてボナパスをあごで示す。

「あれを造ったのはお前たちか」

「!」

「!?!」

「なっ!?! なんて解った?」

驚く魔導師たちにさらに口を開く。

「大した事ではない。私が目的なのだから当然の推測だろう」

「なんで……なんでこんな事したんだよ!」

マノサクスは拳をふるわせた。

「黙れ！」

1人の魔導師がフードを目深に被った紫の瞳でマノサクスを見据える。

「キサマたちに、これ以上こき使われるのはまっぴらだ」

尖った爪で彼を指さし、くぐもった声が怒りを表した。

「こき使われる……？ 何を言ってるんだ。俺たちはずっと仲良く……」

「……『仲良く』だと？」

声がさらに低くなる。

「よくもそんな事が言える。我らをさんざこき使っておいて」

「そつだそつだ！」

「我らはお前たちの奴隷じゃないぞ」

魔導師たちの言葉に、マノサクスとセルナクスは困惑していた。

「どうやら双方に意見の食い違いがあるようだ」

「そのようだな」

この中で2人だけが冷静な態度だった。

「いいから早く来るんだ！」

「断る」

「な……これが目に入らないのか？」

につこりと満面の笑みで応えられ魔導師たちは驚きに戸惑いテ
イリスとセルナクスにダガーを突きつける。

「人質が通用すると思う処が甘いな」

そう言ったベリルの隣でリユートがもの凄い目つきをしていた。

その形相に魔導師たちは「人質にした相手をミスッたかな……？」

と少し後悔した。

「臆していない」という態度を取ったベリルだが相手は魔導師だ、
いつ魔法を使われるとも限らない。緊迫した空気がしばらく続いた。

「……仕方ない」

リーダー格と思われる魔導師がそつつぶやきベリルに右手の平を
向ける。

「少し眠ってもらうぞ」

何かを唱えた刹那——ベリルはすと右手に持っていたものを前にかざす。

「！ あれは！？」

「何！？」

眠るはずの相手が眠らない。

「残念」

ニヤリと笑みを浮かべその魔導師に駆け寄った。

「うつ！？」

他の影よりも少し背の低い魔導師の首もとに腕を回し、持っていたナイフの切っ先を顔の前に見せつける。

「キサマ！」

「卑怯だぞ！」

「言っに事かいてそれか」

ベリルは呆れて目を据わらせた。

「いつの間にかすめ取ったんだ」

「使えるかな。と」

ベリルが持っていたのはリユートを地下牢に閉じこめていた文様だ。鉄格子からその文様の刻まれた丸く平べったいプレートをこっそり手にしていた。

「返すのをすっかり忘れて持ったままだった。彼らにも有効だとはラッキーだ」

恐ろしい強運の持ち主だな……リユートにはもうそんな感想しか出ない。

「ま、待ってくれ！ その方には手を出さないで欲しい」

魔導師たちが慌ててフードを外して懇願し始めた。フードを脱いだ姿は褐色の肌に銀色の髪。そして耳が尖っている。

脳裏に想像するファンタジーの種族といえは……

「エルフか」

「エルフはエナスケア大陸に住んでいる」

ベリルの言葉にマノサクスが応えた。

「頼む、ミレア様を離してくれ」

「……ミレア？」

その名にベリルは当惑した。

*** 刻まれるものは永遠**

自分を不死にした者と同じ名である事に、何故か妙な感覚を覚えてクスツと笑う。

「……」

ミレアと呼ばれた魔導師はフードを外しベリルを見上げた。

美しい少女……アメジストの瞳がベリルのエメラルドの瞳を見つめる。銀細工のサークレットがその輝く銀色の髪をいっそう引き立てていた。

「で、私を狙った理由はなんだ」

「気安く触れるな」

少女は肩に手を置いたベリルに睨みを利かせるがそれにフツと笑う。

「まだ人質なだけだね」

「！」

ナイフを突きつけた。彼に相手の顔など関係ない。時と場合によつては性別すらも無意味かもしれない。

「……」

黙り込む魔導師たちに小さく溜息を吐き出す。

「私の不死が目的なのだろう？ 理由はなんとなく解っている」

「何故解る……？」

その言葉に目を丸くした少女に微笑みながらナイフを仕舞い説明を始めた。

「どうもお前たちと彼らには意見の食い違いがある」

魔導師とマノサクスを交互に示す。

「お前たちはリヤシユカ族に使われていると考えてクーデターを画策したのだろう」

魔導師たちはドキリとした。

「しかし魔法だけではどうにもならない。見たところお前たち、体

力はあまり無いな」

ギクリ……

「不死ならば体力がなくてもリヤシユカ族に勝てるかもしれない。
とか考えた」

ギクギクツ……

「当初は強力な人工生物を使ってリヤシユカ族を制圧しようとした
のだろうが、1匹が逃げ出した」

完璧な推理だ……魔導師たちはベリルを凝視した。

「その逃げ出したやつを探していたら偶然にコルコル族たちが召喚
した人間の中に私を見つけた。合ってるか？」

「……」

ぐつの音も出なかった。

「お前たちは彼らを奴隷のように使っていたのかね？」

それを確認すると今度はマノサクスに目を向ける。

「んな訳ない！ 俺たちは魔導師たちには感謝してた」

その問いかけにマノサクスは大きくかぶりを振った。

「嘘をつくな！ 我らの力が欲しくてウエサシスカに呼んでおいて
用事があるとき以外は魔法を使うなと命令したくせに！」

「それは命令じゃないよ！ 魔法を使うと精神力を使うだろ。それ
を防ぐために……」

「そもそも我らはエルフだったのだ！ しかし遙か昔からウエサシ
スカに仕えてきた我らは北の大地で呼ばれるときを待ち続け、エル
フとは異なる進化を遂げた」

「ダークエルフってどこかね」

「心外な！ 我らはそんな存在ではない」

声を荒げて発した少女にエメラルドの瞳を陰しくして静かに応え
る。

「お前たちが放ったボナパスが何をしたかを知ってもそうでないとい
言えるのか」

「う……」

「大儀など元より存在しない。犠牲を正当化する理由にしか過ぎん」
突き刺さる視線にミレアは後ずさりした。

「とにかく、これはお前たちの勘違いから起こった事だ。お互いに話し合って和解でもなんでもしろ」

ぶつきらばうに言い放ちティリスたちの処に歩み寄る。リユートは足早に冷静さを装いながら少女の隣に立つ。

「ベリル！」

「抱きつくな！」

嬉しそうにセルナクスがしがみついてマノサクスはムツとなり強引に引きはがす。

「てめっ！」

2人は互いに睨み合った。とうのベリルは呆れて言葉が出ない。

「セルナクス！」

「！」

ミレアが声を張り上げリヤシユカ族の2人をやや睨み付ける。

「……本当に我々を下僕扱いしてたのでは無いのか？」

彼女の問いかけにマノサクスはきっぱりと頭を縦に振った。

「まさか、そんな風に思われていたなんて知らなかったよ。オレたちにも悪い処があったんだと思う」

「そうか……」

素直なマノサクスの言葉にミレアは視線を落とした。

彼女は魔導師たちの長の娘である。北の地に住む彼らの肌は太陽の光から身を守るために褐色となり、厳しい環境に適応した小柄な体格となった。

「我らが造った獣は、誰かを傷つけたのか？」

小さな少女はベリルを見上げて問いかける。

「多くの種族の命を奪ったと聞いた」

魔導師たちはそれにざわついた。

逃げ出したとはいえ自分たちの支配から逃れた獣がそんな事をすると想像もしていなかったのだろう。

「今だって俺たちを殺そうとしていたがな」

リユートが怒りを帯びた声で応える。ティリスを人質にされた事にまだ怒りが収まらないようだ。

「……」

ベリルの服を見つめる。その血の跡がどれほどの傷を負ったのか悟らせていた。

「……痛かった？」

「まあ普通の人間並みにはね」

肩をすくめて見せると、少女はその胸にそつと手を置いた。

「ごめんなさい……」

強くまぶたを閉じて体を震わせる。

「この事はここににいる者だけの胸に収める事とする」

「！？」

ベリルの言葉に、そこにいた者たちが驚きの表情を見せた。

「余計な争いは私の好む処ではない」

「ベリルがそう言うなら……」

「うん」

マノサクスとセルナクスは渋々ながら従う事にした。

「俺たちには関係の無い事だ」

「そうだね」

リユートがぶつきらばうにんえティリスは笑顔を浮かべる。

「ありがとう……」

顔を伏せぼそりとつぶやいた。

「罪を許した訳ではない」

「！」

目の前に立ち厳しい眼差しを向けてベリルは言い放った。

「……解ってる」

「どうすべきかは自分たちで考えろ」

そう言って離れていく。しかし――

「！」

腕を掴まれ振り返ると少女が潤んだ瞳で見上げている。

「礼がしたい」

「いらん」

「そういう訳にはいかん！」

「そうだそうだ」

魔導師たちがミレアの言葉に賛同する。ベリルは眉をひそめた。

「では……」

「！」

彼女の腕にあるブレスレットを指さす。

「それで構わん」

「こんなものでいいのか？」

色とりどりのさざれ石のブレスレット。高価なものでも無いようだがベリルは無言で頷いてそれを受け取った。

「あのっ……」

「なんだ」

「私にも……何か」

「は？」

目を泳がせるミレア。

「ミレア様に何か捧げ物を！」

「女性には何か返すものだ」

魔導師たちは彼女を後押しするように声援を送る。

「……」

渡せるものなどある訳が……ベリルは当惑した。

「！」

ふと気がついてスローイング・ナイフ（投げ用ナイフ）を取り出し、ミレアに差し出した。その柄には、剣の切っ先を上に向けた柄に一对の翼その後ろには盾を簡略化したマーク……ベリルのエンブレムだ。

「ありがとう」

ミレアは嬉しそうにそれを受け取った。

「撤収だ」

ベリルがそう言ってようやく全てが幕を閉じた。

コルコル族の集落に戻るとひとまずの解決を見せた事に皆は喜びその夜は宴が催された。マノサクスとセルナクスはその宴会に参加し、嫌がるベリルの奪い合いを酔っぱらった勢いで繰り広げる。

それに笑いが止まらないティリスを緩やかな眼差しで見つめるリユート。

別れが近づいている事を感じながら楽しい一夜を過ごした。

翌朝——二日酔いのマノサクスとセルナクスをすまきにしてベリルはささやかな復讐を遂げる。

広場に描かれた魔法円にまず召還はリユートとティリスの2人が立つ。

「本当にありがとうございました」

レキナたちが苦い笑みで悲しげに発した。

「出会えて良かった」

ティリスが涙を浮かべながら応える。

「リユート」

「!？」

ゆっくり近づくベリルに青年は少し警戒した。最後の最後まで何かされるんじゃないかと疑いを見せる彼に呆れたベリルだが青年の耳元で何かをささやく。

「!……」

呆然と見つめるリユートに軽く手で応えニヤリと笑った。

「なんて言われたの？」

「なんでもない」

そうしてメイジたちの詠唱が響き始める。地面に描かれた模様が微かに輝きを放ち2人を風が取り巻いていった。

「リユート」

「！」

ベリルに何か投げつけられ片手で受け取ると、それは鈍い金色の輝きを放つ空薬莢。からやっきょう

「……」

薄れていくベリルの姿に小さく笑った。目を閉じて彼の言葉を反芻する。はんすう

『私から見ればお前はただの人間だ』

気休めではなく本心からの言葉なのだろう。

そんな言葉で今まで背負ってきたものが降りる訳ではないという事も、ベリルは十分に解っている。

別れる友に残したかった言葉……ただ、それだけだ。二度と会う事の無い友——しかしこの出会いは記憶に残る。それだけで充分だ。

「！」

視界が開けて目の前には見慣れた森の姿が広がっていた。リュートとティリスは自分たちの世界に戻ってきたのだ。

喜びと共にレキナたちの顔が浮かぶティリスの目に少しの涙。

「！」

拭って胸元を見ると青い石……レキナたちのお守りがそこにあっ

た。
「リュート！」

それを握りしめ笑った少女に青年は無言で頷いた。

次はベリルの番だ——

「ベッ、ベリル！」

「もう少しいろよ！」

すまきにされていたマノサクスとセルナクスは必死にはいつくばりながら魔法円の処までやってきたその姿にベリルは眉間にしわを寄せる。

「お前たちと別れると思うと嬉しいよ」

「ひど！」

「なんて事言うんだよ！」

「わゝ！？ 屋根が……！」

メイジたちの詠唱の向こう側でコルコル族の声が聞こえた。どうやら誰かの家の屋根が壊れたらしい。

「……」

少し考えて魔法円から静かに体を外した。

「ベリル様……？」

首をかしげるレキナを見下ろしフツと小さく笑う。

「屋根の修理は大変だろう」

「！ ベリル様」

ワツ！ とコルコル族たちは沸き立った。

「ベリル！」

「やっぱ俺と別れるのが嫌なんだろっ」

「お前たちはウェサシスに帰れ！」

すぐりつくマノサクスとセルナクスを足蹴にした。

一ヶ月ほどを過ごし再び召還が行われた。この世界に來た時に着ていた服に着替え魔法円に入る。

涙を浮かべるコルコル族たちに笑みを浮かべ視界は徐々に薄らいでいく。

「……」

視界が開けて見回すと確かに自分の家だ。

「！」

止まっていた腕時計が秒針を進めていて壁にかけられた時計に目を移す。

「ほう……」

この世界でベリルがいなくなっていたのは数秒も満たないらしかった。

“夢”と簡単に片付ける事も出来る。

だが胸にぶらさがっている青い石と使った分だけ無くなっている武器が現実だったと知らしめる。

「……」

そして手首に飾られたさざれ石に目を細める。

「なかなか良い経験だった」

笑みを浮かべシャワー室に向かった。

END

***刻まれるものは永遠（後書き）**

*最後までお付き合いくださりありがとうございますm（――）m
つたない文章ではありませんが、読んでくださった方が少しでも
楽しんでいただけたら幸いです。

作中に登場するティリス、リユートの2人は観月 らんサマのキ
ャラクターです。これらのキャラクターは観月 らんサマの著作権
下にあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4062t/>

クライシス・ゾーン～翡翠の悪魔～

2011年8月30日03時25分発行